

鹿児島県史料集  
(30)

桂久武書翰

鹿兒島県史料集  
(30)

桂久武書翰

## 刊行のことば

鹿児島県史料集第三十集として、ここに「桂久武書翰」を刊行いたします。

本書は、幕末・維新时期に薩摩藩の家老として重要な役割を果たした桂久武の書翰をまとめたものであり、本史料集第二十六集「桂久武日記」の続編として刊行いたしました。

県史料集の刊行は、資料の保存をはかり、郷土の研究に役立てることを目的にすすめてきた事業の一つですが、史料集の刊行が今日までとどこおりなく続けられていることは、県史料刊行委員の方々の並々なぬ御協力のお陰だと心から感謝しています。

今回の「桂久武書翰」は、元鹿児島女子短期大学村野守次教授の編纂によるものですが、先生が印刷原稿完成半ばにして他界されましたので、浄書を蒲生町大脇毅氏に、解題を鹿児島純心女子短期大学芳即正教授にお願いいたしました。

村野先生の御冥福を心からお祈りいたしますとともに、この史料が地方史の研究に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成二年三月

鹿児島県立図書館長

須佐美

新

# 例言

- 一、本書は村野守次氏の編集になる「桂久武書翰」を底本として、大脇弘毅が解説・浄書したものである。
- 一、編集者の施した修正や注記以外に新に解説者において付した注は《》で囲んだ。
- 一、見せ消は、その文字の左側に「ゝ」を加えて、右側に改めた文字を記した。
- 一、漢字は底本に従って使用した。
- 一、読点「、」および並列点「・」は適宜施した。

## 解 説

昭和六十年年度の本資料集(26)『桂久武日記』の続きとして、村野守次氏が編纂された『桂久武書簡』は、印刷原稿の出来上がる前に同氏が他界されたので、その浄書は大脇弘毅氏に依頼して印刷に回された。その後ゲラ刷りができた段階で解題を書くように言われたことからペンをとったが、身代わり執筆であることから村野氏の真意を尽くし得ないであろう事をお断りしておく。

書簡は東京大学史料編纂所の『島津家文書』、鹿児島県史料の『忠義公史料』、『大久保利通関係文書』(吉川弘文館)、『西郷隆盛全集』(大和書房)、『五代友厚伝記資料』(東洋経済新報社)などを出典とするものである。それらの出典については各書簡に記されている通りである。

また村野氏は書簡宛名の人物などについて、簡単な注記を行っているので次にそれを記録しておく。(数字は書簡番号)

一、鎌田出雲は正純と称し、桂久武の岳父。久武は当時小吉郎と称し、出雲の長女正を娶る。

三、田尻務は桂右衛門久武の実兄で、日置島津家の三男として生れ、田尻家を嗣ぐ。

二九、この手紙は田尻家に現存す。

村野氏の書かれた注記は以上であるが、なお三二、三三、三四には共に「解説」として『西郷隆盛全集』の「解説」がそのまま収録されている。

なお本書簡集は桂久武の書簡を全て網羅したものではない。村野氏も目次の後に次のように記している。

○その他の桂久武書簡(左記関係の文書は発表の書名のみを記載して置く)

一、市来四郎収集の石室秘稿「桂久武所蔵書類」十四冊(国立国会図書館憲政資料室所蔵)のうち桂久武書簡

二、明治百年記念館調査室寄託島津忠承氏所蔵文書「桂久武史料」中

○ 三七四 文久二年十一月十四日 小松帯刀へ

○ 一六一五 慶応三年二月晦日 小松帯刀へ

○ 一六二七 慶応三年三月二十五日 小松帯刀へ

○ 一六九七 慶応三年十一月五日 小松帯刀へ

○ 一六九九 慶応三年十二月六日 小松帯刀へ

○ 一七四七 明治元年二月二十一日 小松帯刀へ

以上であるが、一については書簡数は記されていない。筆者(芳)が黎明館のコピー本で調べたところ、所在不明の綴り「その一」に含まれる分を除いた七冊については(村野氏は全部で十四冊とするが実際は十一冊と思われる)、その中には桂あてのものが多いが、桂自身が出したものはたった一通で、全体的に少ないのではないかと思われる。

なおこの外に筆者の気付いたものでは、大阪商工会議所が編纂刊行した『五代友厚関係文書目録』に本書に収めた以外に二十六通の桂書簡があるが、それはマイクロフィルムに収められているだけで活字化されていない。この二十六通のうち一通は有川朴陰宛で、他の二十五通は五代友厚宛で、本書に収めた六通を合わせると五代宛の桂書簡は三十一通ある事になり、個人としては最も多いのではなからうか。

なお三、四、五号書簡の年代について、解題筆者は次のように考証した。

三は文久三年。内容が大島在任中のものであり、桂の大島勤務命令は文久元年末（出発は二年正月）で、元治元年六月鹿児島に帰り着いている。これからすると亥年は文久三年となる。

四は慶応二年。鹿児島から京都に滞在中の小松帯刀にあてたもので、小松の上京は元治元年九月京都着、次は慶応元年十月着、第三回目は慶応二年十月着で、最後は明治元年正月で、小松はその後同三年七月大阪で死去する。このうち第二回目の慶応元年は桂自身十二月上京し、二人とも十二月は京都滞在中となり先ず無理である。また文中に五卿問題などがあるので明治もはずす必要がある。そうすると一か三となるが、英人住居を竜洞院跡に作るつもりなどあり、元治元年は無理となる。以上のような消却法で残るのは三の慶応二年となるのである。

五は慶応三年。中将様とは島津久光（元治元年四月十一日従四位上左近衛権中将昇進）のことで、小松の書簡を七日に受け取っているが、長崎経由京都からのものと思われ、久光京都滞在中の書簡と考えられる。「岩下氏帰朝」とか「モンブラン並二佛人都合十一人：近々来着之模様」、これについて「上海迄五代差遣」などというのを見ると、一八六七年すなわち慶応三年のパリ万国博覧会に出張した家老岩下方平が帰国するとき、佛人モンブランを連れてくる訳であるが、モンブランについて悪い評判が聞こえてきたので、五代を上海までやってこれを避けさせようとした話（鹿児島県史参照）と思われる事から、慶応三年が妥当であろう。なお二十四号書簡を村野氏は明治五年とするが、文中に豊岡県令の辞任を出したが未だ許可が出ないで迷惑しているとある。桂に豊岡県への転任辞令が出るのは明治六年であるので、これは明治六年に訂正しておいた。

（芳 即 正）

# 目次

一	安政四年十月十七日	鎌田出雲宛	一
二	安政五年一月二十九日	鎌田出雲宛	二
三	八月八日	田尻務宛	三
四	年不詳十二月七日	小松帶刀宛	四
五	年不詳八月十二日	小松帶刀宛	五
六	文久二年十一月	何某宛	六
七	慶応元年十二月六日	島津求馬 伊集院左中宛	七
八	慶応元年十二月二十六日	伊地知壯之丞 市来六左衛門宛	八
九	慶応二年二月六日	伊地知壯之丞宛	九
一〇	慶応二年二月六日	蓑田伝兵衛宛	一〇
一一	慶応二年四月二日	伊集院伊膳宛	一一
一二	慶応二年四月二十六日	黒田嘉右衛門宛	一二
一三	慶応三年二月二十一日	小松帶刀宛	一三
一四	慶応三年四月四日	大久保一藏宛	一四
一五	慶応四年一月十八日	西郷吉之助宛	一五
一六	明治元年十一月二十三日	伊地知壯之丞宛	一六
一七	明治二年四月六日	大久保一藏宛	一七
一八	年不詳二月末休日	西郷吉之助宛	一八
一九	年不詳五月四日	西郷吉之助宛	一九
二〇	明治三年十月二十二日	大久保一藏 得能良介宛	二〇
二一	明治三年十一月五日	大久保一藏 得能良介宛	二一
二二	明治四年八月十七日	大久保一藏 得能良介宛	二二
二三	明治四年十月二十一日	西郷吉之助宛	二三
二四	明治五年四月三十日	五代友厚宛	二四
二五	明治六年三月三十日	五代友厚宛	二五
二六	明治七年三月二十一日	五代友厚宛	二六
二七	明治九年九月二十六日	五代友厚宛	二七
二八	明治十年一月二十八日	五代友厚宛	二八
二九	明治十年九月四日	田尻英二宛	二九
三〇	八月十三日	兵庫軍務所二上申書	三〇
三一	慶応元年三月七日	西郷吉之助宛	三一
三二	明治二年七月六日	西郷吉之助宛	三二
三三	明治二年十二月二十七日	西郷吉之助宛	三三
三四	年不詳正月六日	西郷吉之助宛	三四

(東京大学史料編纂所所蔵)

幸便に因て啓上仕候、冷気の砌御座候処、先以て御勇健被成御勤、珍重の儀奉存候、爰許にて

上様益御棧能被遊御座、別て御壯健の御事

若君様にも弥御丈夫に被為入、日増御成長御健に被為在候由、旁以目出度、御互千歳萬亀大慶奉存上候、次に尊館御一統御揃至て御無事に御座候間、是又、尊慮安思召可被下候、扱、当分は何事も至極成靜謐に御座候、弥御仁政敷遊され奉感服候次第に御座候、

殊更先日は御筆御書取を以て文武の儀々仰出相成、同御拜見可被遊筈と奉存候間、態々写後差上不申、格別成御趣意誠に恐入、難

有心肝に相徹、身の置所も無之、只々飛揚仕候次第に御座候、此節の仰出は一統感服仕候模様と相見得、未為何評判も承り不申、

決而奸人共何か難説も内々は可有之候得共、ヶ様に無抜目十分に御書流し被為在而は、一言も奉難訳に無御座候得共、実に不容易

格外の御沙汰にて、御深慮之程奉伺、我々哉空敷打過候てハ恐入儀に御座候、さて晩学ながら折角何扁心を可相用事と存し、是迄

学問の嗜等薄く、今更千悔仕候、只今にても能都合も御座候ハ、是非遊学にても仕度含に御座候得共、心に任せ不申、甚残念之至

りに御座候、先度も申上置候通、若哉思の儘参り候ハ、直に踏出す考に罷在候、扱、此節仰出の趣つらく存慮仕候処、先比御

上書の御趣意にも相貫き候様に相見、別て頼母敷、尊公にも一入難有可被思召と噂共仕事に御座候、右御牙喜談に付奇ながら御役人以上

敷舞台にて 仰出相聞候節、如何いたしたる儀に御座候哉、鳥津

帯刀小用相もれ御畳之六七枚程相掛、其身は腰ハ裾迄混ぬれに御

座候由、大物笑に相成、世上取々の評判に御座候由、何様兼而放

埒成所行も有之、養妹様相犯し候哉之風評(も力)御座候間、自然ヶ様

の節、金玉の罰とふとの評判も有之、段々言置候様子にて弥人望

尽果可申、一日は出勤も有之候得共、当分ハ病氣にて引入被罷居

候由、当然の儀と存し候、殊に文武館掛も被仰付、旁不都合之至

に御座候、一日は何も不移只平氣にて出勤有之候処、兄弟類中ハ

申さとし引入候由、更御役御断杯の吟味相談迄有之候哉にちらと

承及申候、少男氣も御座候ハ、能き引時と被存候、乍併、此程

ハ琉球守衛方之相伺に被相成居候由にて、御用承知被致候得共、

病氣にて未罷出不申、誠に難有思召にて可捨物さへヶ程迄御丁寧

の御取計、御仁徳の程奉恐入候、此節、文武館掛下総主水・巨主

馬・帯刀・武兵衛・次左衛門・壮右衛門、御目付加藤権兵衛・種

子鳥次郎右衛門、其外横目進達掛等被仰付候得共、省略不申上候、

久敷申絶候儀、殊に此節は別段御趣意被為在、先新規の様に御座

候得者、未趣法も不相付折角吟味可被申と被相察申候、当分之聖

堂学者にて中々希候思召候程振起之儀は、此涯興候六ヶ敷御座候半敷、

責而横山にても罷在候ハ、少は御趣意相貫き可申、外々にても

一廉有之儒者逆も無御座候、外にハ平川喜兵衛位學術成熟之者ハ

無之由、其外大体相心得候腐儒さへ無多事位に御座候間、一統衰

へたる時節に御座候へは、年数不相掛候ては、学問扁より御用立

候人物者中へ急二は出来申間敷、只今ハ一統心之用様も相替、活用之人物も相生可申哉と存申候、遊学願出候者モ段々有之模様と相聞承申候、町田家も兩人願出候賦に承及申候、助太郎殿に



は一体乙名敷実体に相見得申候間、決して遊学共御座候ハ、相応に出来上り可申哉と頼母敷位に御座候、扱、豊奸出立後は先奸賊共之噂も承り不申、併根深きものに御座候間、よなく被<sub>り</sub>会も有之筈、鳥将大奸平奸互に密々会合有之由、大形ハ夜会にて八ッ前後迄深更に相成、賀籠にて相返行候哉承り申候、決して当世の議論は勿論、色々奸謀相行可申は案中の事と存申候、我々心を用ひ候程には彼等も応<sub>懸</sub>配慮の筈被<sub>り</sub>存候、今更如何して動きは付申間敷候得共、奸術中々油断成兼、当分は別て潜まり何扁念を入、勘を被<sub>り</sub>取さる様申談置申候間、尊慮可易候、就てハ不忠議成儀到来致、甚念遣仕申候訳に御座候、去る七日此愚兄へ駿州被<sub>り</sub>申候ハ如何いたし相もれ候哉、豊州出立五日前と前日両度、駿州<sub>江</sub>豊州申には何か聞合事御座候半哉と相尋られ候由、駿州さわらん牀にて成程色々承知仕居候事も有之候得共、為指事も無之との返答に御座候処、豊奸申には自分か事を聞合被<sub>り</sub>仰出、下総殿・主水殿御裁許掛は川北・米良兩人<sub>江</sub>被<sub>り</sub>仰付候由、ちらと承り如何の向に御座候哉、<sub>ケ</sub>條書之内々取被<sub>り</sub>納かし高一件の事御座候由、是は<sub>ケ</sub>様<sub>ケ</sub>様と見事に申解き、少も不法之廉も不相見得、聞合形行とは相違いたし候由、内證の儀も<sub>ケ</sub>條有之候由、先年川畑魯水を以、御手元<sub>ハ</sub>御聞合も為有之様<sub>ハ</sub>風説も承り、此節又々相起候由、乍併、<sub>ケ</sub>様の訳に御座候得者、明白に御聞糺被<sub>り</sub>下候ハは、別て仕合に御座候との咄にて貴公にも相談御座候哉と被<sub>り</sub>申、成程右様の咄も承り候得共、御方御承知之上は御存分<sub>ノ</sub>御取計可被<sub>り</sub>成旨申置、其後取しめ承り不申由、相答候処、先年調所新島津之兩人聞合杯の事御沙汰御座候得共、重役の間合等は先大切成儀に御座候間、程能御

詫申上相濟候事も為有之杯<sub>之</sub>と咄も有之、夫々引次吉利仲を若年寄に相伺候処、

上様より其方へハ下総ひどくきらいぞ、<sub>ケ</sub>様の伺者余程考をして伺出候様に致せとの御沙汰も有之候と、豊州被<sub>り</sub>申候間、不入儀に御座候得共、又御心得にも相成可申候間、申置との事に御座候由、此節の聞合も至極隱密に手廣く不相掛、念に念を入れ候ての聞合に御座候得共、<sub>ハ</sub>迎も洩出可申訳に無御座候処、段々吟味も尽し申候得共、爰こそもれたる処と申も無御座候間、甚不審而已に御座候、駿州驚たる儀に御座候て、即日にてても又能き時宜も可有之候処、数日相過申たるを以段々致工夫候に、頭の振りはまり薄き訳は決して内情能結付居候に疑無之、此聞合相発候節も心得せよ、あたりは互に深切をかよわし候も難計、何分数日相過候上申入たるは甚不審千萬に御座候、少も世話に存たる儀とは相見得不申、豊奸出立は去月廿八日にて七日かたに申出候儀は程<sub>マ</sub>り大事に思ぬ様被<sub>り</sub>存申候、右之形行も即言上仕候処、少も構ぬとの御沙汰に御座候、其方へきろふておると御沙汰被<sub>り</sub>遊候哉之旨も御尋申上候処、夫は左様の訳ては全く無之、仲を若年寄に伺候儀ハ有之、其時人望かとふもないに因て、先其様成伺は能吟味して出せとは申置たとの御沙汰に御座候由、彼も此方<sub>ハ</sub>思ふ丈は勸を取り<sub>居</sub>形と相見得申候、又奸智を以駿州を探りて、右様の場合に相成たるも難計御座候得共、何分数日終へて申も不審、又駿州<sub>ケ</sub>様の儀をたとへ詰込居候とも、容易に申間敷儀にも御座候得共、腰拔武士の腹はた何分にも頼少き故、難計事に御座候、先度も申上置候通、弥御至願一條不被<sub>り</sub>為叶候折に被<sub>り</sub>仰上候思召にて、周防殿初御家老中

少添書様の物御認させ被仰上候賦に御座候、最早周防殿には認差  
上被置候由に御座候、此節之一戦は見事に仕謀せ可申は案中と存  
候得共、夫程迄勤取居候事に候間、決て色々奸斗相働き可申ハ相  
違有間敷、永江杯<sup>江</sup>は談合可仕候得共、高輪御前<sup>江</sup>は直には中々  
申上解かたく候得共、何分甚敷さかひにハ別條無之、若御至願一  
條動きも付候ハ、誠に大切成事と存申候、此節の出立は殊の外  
さわやか成様躰にてうるひ切不足いたしたる模様<sup>出</sup>に御座候間、京  
都にても一杯の働いたし、出府の上は死くるひに奸策<sup>廻らし</sup>を迫り申候  
も難計、折角御氣を付被置度尊公様には、同服心と相考へ居候姿  
に御座候間、此節ハ弥服心之様に御取持被成候て、奸策委く御聞  
拔被遊候方決て此方の為に可相成謀を伐の御工夫有之度、乍恐奉  
存候、折角白歯の見得ざる様に御慎被遊候方此方の大幸を得可申  
ハ案中と奉存候、右様の儀者早々御洩被下度奉願上候、将又、去  
る朔日西郷吉兵衛御徒目付にて御鳥預御庭方と被掛置、江戸話<sup>話</sup>被  
仰付、糺合方星合取締致見聞時々申上越候様被仰付、当月末かた  
出足之賦に御座候得共、末日限等相極不申、自然来月にも相掛可  
申哉と存候、段々外方等の御用向も多く有之由、追付出府可仕候  
間、不申上ながら御取会可被遊候、爰許の事情も相分り可申、我々  
共にも及すなから末席に相加り折々被会仕申候、此人物は中々大  
体の人物にてハ有御座間敷義中の逸物と存申候、萬扁に心を配り  
御国家の為力を尽し申たる事はあけて数へかたかるべく哉、容  
白<sup>マ</sup>等は至て鹿忽に相見得申候得共、叮簡の乙名敷事は老先生かた  
も手を置可申、天下に押たしても恥かちさる人物と卑見の浅量を  
以、近比押究たる申上様に御座候得共、多く見違ひ有間敷哉、御

面会の上御安堵可被下候、葦田杯とは折にふれ説の不合処も問々  
可有之哉に候得共、西郷少量は中中手取太く我々共及かたき事而  
已多く御座候、先は何御機嫌申上度、每なから前後書乱し不敬悪  
文御賢明を以て、程能御読取被下度奉願候、恐惶敬白、

十月十七日

桂小吉郎

出雲様

参人々御中

尚々漸く寒氣に向折角無御痛様御大切に御保養專要の事と奉  
折上候、大正にも度々出会申候、御目利の人物承及居る儘に  
相見得、至て朴質堅行に有之実に頼母敷存申候、山の内にも  
被会申候処、是以儘成人物実隼君子の風有之、一言の俗談さ  
へ則を逃れ不申、実行の人物聞くより感心仕候、殊更千辛萬  
苦に身を投込、事ともせぬ氣象我党の定規と存申候、兎角老  
練の人に□を当られず候ては鹿卒の働き申候ともすれは水  
を入さしかねを当てもらい候様、吟味を遂置候、将又、伊集  
直轉黜之儀此節も又宜敷御序御座候て申上候処、合点いたし  
而おるとの御沙汰に御座候由、不遠御沙汰に可被為及哉と被  
存候へ共返すべく此節豊州出府に付て、意中に落入奸謀御聞  
取に可相成、折角其方<sup>江</sup>御向け飽迄彼か奸策の所行御見拔被  
成度存申候、此節西府<sup>都</sup>出府に感付而も何扁能氣を付居候様御  
沙汰も承知仕候由に御座候間、御打合の節仰含可被成程之儀  
御探得有之度存申候、乍末筆去る十二日二の丸御茶亭<sup>江</sup>周防  
殿・下総<sup>江</sup>被召出、御歌会御催にて八ッ半時分より参上仕候

処、緩々御咄にて夜入五ッ半過迄罷在、色々御丁寧之御会釈にて御座候由、初而ケ様の御席江罷入恐入難有次第身に余り候訳に御座候、御詠は別紙書写差上候、尤御当座にて御身辺江奉仕候衆にて、勿論、堅山・中山・山田・清水・江夏との迄も罷出候由、翌日は谷山御遠馬慈眼寺様江御出の様子と被相伺申候、爰に感心の儀は

御自分分御腰御弁当にて為御濟被遊、御膳所等より全く差越に不及、別段御重迎も為御揃無之由、各腰兵糧にて御座候由、近代承り不得事にて恐入次第に御座候、我々式は最早握りめしにても能過る位の事に御座候、か程迄御身辺より御心を御用ひ被遊候得共、世上の人は誠に移り遠く心に通徹いたし候筋の咄にては更に無之、弥思ひ迫申候得は残念の至に御座候、兎角善悪明白に御分ち無之候てハ、旧深榮の幣如何して一新可仕訳に無御座候、先第一不孝子を御糺し、次には御趣意に相戻り何も不相憚我侘に相過、内證の侈り等甚敷、酒会等もてはやし候者共、頭立候者両三人も屹と御沙汰御座候は、一鉢の風俗相変り、或は山吹の間辺制しかたき御役場の風格にも相響きかた々宜敷、決て先度被仰上候形行にて、山々御含可被為在候得共、未何かと御憚りの御様子と相見得申候、自今御在国中には御運ひも付可申候得共、其内中々々氣短の生質被兼申候、頓首敬白、

一一 安政五年正月廿九日

鎌田出雲宛

(東京大学史料編纂所所蔵)

両度の尊翰相届忝拜誦仕候、未揃兼候氣候御座候得共、弥御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、於爰許

御両殿様被為揃、益御機嫌能向御健に被為入候段、折々奉承知候事にて安心之事に御座候、尊館御異事なく其外何方にても一統無異変罷在申候間、乍恐御放念被下度、爰元其後は何事及至て静謐に御座候、去廿四日堅武州往来急き之御使にて被召立、最早彼の一条無相違為御揃相成候儀と奉存候、其後は

御前被召出も無之、先月初かた被為召候節、御昇進御運ひ相付候は、此上

高輪の御都合被遊兼候半と相伺候へハ、少も差構訳に無之との御沙汰に御座候ま、就而は其後為何御沙汰にも不被為及御事に御座候得は、無相違由為御揃待相成候事と先は安心仕申候、併、御直に此通申上たるとの御沙汰無之内ハ、とふも篤と安心には成兼候様に御座候、先達て堅山江御用談にて被逢候節、此節は御被除無之候ては人氣振起不申との咄にて至極振はまり居口氣に御座候由、若哉相替儀も致到来候ハ、何より口合可申候処、無其儀被罷登候に付、大丈夫と相考申候、此節と便と尊公御差越相成候書付も、

即差上之内にも是非々此節に御取除被下度旨、申上置候付、斯迄も手を尽し成熟成兼候ハ、兎角詮方なき次第何れ幕命をかり手強き働不致候而は、外に手之付様無之事と思へは残念の至に御座候、不遠内には御前御都合伺、御直に御尋申上賦に御座候間、若此節参り兼候時宜も御座候ハ、早速幕江手之迫候様御取計被下度、当方にて手の延ひ候丈はいくらも相尽し可申不及儀は、無

抛も国家の為恥をも忘れ人手にすかり候外手段も無御座候、自  
奸魁下国の賦に御座候由、ちらと相分申候儀も御座候、勿論

帝都<sup>江</sup>御使者も被仰付候筋被相聞申候、夫きりにて打下し跡にて

御計策に御のせ被遊候様と奉存候、表通りにてハ豊筑兩人の間

高輪公思召次第御下し被遊度、鎌田儀被召置旨被仰上候との段承

り申候、尊公様御儀はと暫くは御氣張被下度、無左候ては、無暗

の人而已にてハ西郷等有志之者甚心配にも相及可申哉と奉存候、

当時は自他共に急迫の世の中己れ一人の斗策迄にては参り兼、か

たわら天下の大儀を計、各国の情をも汲取受不申候而は不相叶時

節、我身さへ能くはいたし兼事而已と相考申候、折角いたし候内

には陽氣発達の時節罷成、各一分万量も出候時節と相楽居申候儀

に御座候、先は御札之御礼上御安否御伺申上度、如此御座候、敬

白、

正月二十九日

桂小吉郎

出雲様

参人々御中

追啓私事、十一日御用承知仕居候処、不快有之、去十五日御

受罷出候、未年切も無御座候得共、無存掛私に不似合過分の

重職被仰付、恐入難有次第奉存候、乍御礼申上度、如此御座

候、再尾

猶々折角時節柄御自愛專要奉存候、愚兄事<sup>江</sup>両度の御花翰追

て相届置申候、御返札差上候に付、御受取被下度候、以上、

三 亥八月八日 田尻務宛

(東京大学史料編纂所蔵)

尚々時分柄折角御加養奉祈上候、日置ニテ御母上様御配慮カ

タ(マ)奉察候、当島ノ儀ハ実ニ大平安然ト罷在候間、是丈ハ

少シモ御掛念被成下間敷奉願候間、宜敷御取合可申候、只山

猪相手ノ軍稽古ナトニテ日ヲ暮申候賦ニ御座候、毎々乱筆御

高免奉仰願候、

当嶋留船未滞船罷在候付、尚又御機嫌奉伺度、漸ク肌持等モ能ク

罷成、御勇健被遊御座候半ト恐悦至極奉存候、日置竿岡其外御一

統様御同前御座候半ト奉存候、於爰許、私ニモ無異条至極ノ元氣

益盛々ト罷在候間、聊御掛念被成下間敷奉存候、将又、別紙之通

爰許風説承届、国家ノ大難実ニ難忍訳合ニ成立、虚実分兼候儀ニ

ハ御座候得共、此内ヨリ自然ノ時機殊ニ風聞トハ乍申モ、此内ニ

ハ実説ニモ近キ廉モ有之候得ハ、只々苦心仕居候事ニ御座候、別

紙ノ趣ニテハ先大變ノ内ナカラモ格別成事ニモ不成立候得共、一

度相初マリ申候テ以後難渋今ヨリ相察居申事ニ御座候、兎角此辺

ノ儀ハ宛ヒノ前ニテ、今更少モ驚キ可申訳ニモ無御座候得共、兎

角宗国ノ患我等御枝葉ノ身トシテ、只安然ト罷在候儀共心外トハ

存候得共、兎角此辺島工守衛ノ名目ニテハ此地ニ切齒罷在候計ニ

御座候トテモ、書面通ニハ無之トモ何カ似寄候儀モ難計御座候付、

既ニ飛船取仕立御機嫌伺モ可申上哉ト詰役ハ申談候得共、幸留船

滞留イタシ居候付、右ヨリ御機嫌向合、右届書所々取替相認向越

候間、右届書ハ其御考ニテ御覽可被成下候、何分ニモ當時儀十二

八九ハ風説而已トモ難存御座候、若又、風説通ノ向ノ事モ御座候ハ、<sup>(ママ)</sup>騷働思ヒヤラレ申候、其後ノ御手当向等実ニ混雜ノ筈ニ存申候、爰元異船ノ帆影サへ相見得不申、シカシ繁々ノ来寇ニモ御座候ハ、自然近寄セ可申哉、イツレ寸鉄モ不用嶋柄ニ御座候得ハ、舌戦ノ外無御座ト存申候、余リ豪氣ナ申事ニ御座候得共、兎角舌頑ニテ屈伏為致心組ニ罷在候事ニ御座候、右ニ付テハ御米繰如何ト今ヨリ是ニハ心配仕事ニ御座候、扱又、宿元ノ儀乍不申可然御取斗被下度御願申上候、辺鄙抱地等モ致居候テ、則ヨリ留守中ノ事ニモ御座候付、為迦置候テカタク、萬事仕合ト存候得共、是以待居不申、イツレ往々来寇甚敷候ハ、ドフカ手当モ無之候テハ難叶存候間、何卒可然御吟味被下度御願申上候、扱私共交代之儀是ニテ相飛候半ト存申候、誰レ存付候人モ有之間敷筈ト相考へ申候、一層芝居相濟迄ノ間安然罷在候モ、却而難有次第ニハ御座候得共、我身ノ安キ而已ニテ国家ノ難儀ヲ与所ニ見ナシ、親兄弟隔ノ儀ハ実ニ此時ニ至リ大歎息ノ至御推計可被下候、シカシ自然開運時節ニモ近寄候半歟ト、折角当末便相待居申候、先ハ此旨大略ナカラ奉伺御機嫌度、日置其外御一統様へモ一札拜呈可仕候得共、態々差上不申候間、何卒可然御取成被下度御願申上候、恐惶謹言、

八月八日認

桂右衛門

田尻務様

尊拜呈

四年不詳十二月七日 小松帯刀宛

尚々毎々通、指急キ相認前後不綴、御賢覽御推計可被下候、指掛相認候得ハ認直シモ出来不申、別而不綴ナカラ之儘差上候事、不足事モ不少、宜敷御詭取奉願候、

田中清之進飛脚ニ而被差上貴札並ニ御鶴声之趣、逐一相達拜聞仕候、船中無御滞御着岸、猶又、御健剛被成御奉職奉珍重候、寒來弥増相募、御地之寒威ハ一入候事ト奉遙察候、爰許 御両殿様之外様益御機嫌克被遊御座、恐悦御同慶奉存候、小子無異條相勤罷在候間、乍余事御放念可被下候、扱御発途之砌ハ何分急速之事ニ而染々御離袖ノ儀ニモ不至、甚御残多次第二御座候、扱御地ニモ御着涯ヨリ散々之次第ニ成立、実ニ残念千萬ニ御座候、就而ハ、御談合相成居候手段モ最早可被施時宜モ有之間敷、断然御引取之筋ニ良々御決策ニモ相成居候処、撰海異船渡来之一條モ有之先方御見合之由、其後之処如何ニ候半歟ト深ク想像仕候儀ニ而、多分ハ外ニ御良策モ相立兼候半カ、シカシナカラ板閣方<sup>出</sup>御加候段モイ細御仰越、早速 御聴ニモ相達置候、何分手数トハ乍申究シタル形ト相見得、其後一橋辺<sup>江</sup>御出之場ニモ相成候半、漸ク考候機会ニモ至ラヌトシテ此期ニ至リ、最早致方モナキ事ニ而 朝廷之上如何ト実ニ 皇国之興廢此時ニ差迫り、来春ニハ兵庫<sup>江</sup>異船<sup>變</sup>到来之噂モ有之候由、既ニ開港之期限ト申テモ来冬遠カラヌ事故、只今之内朝廷ニ紀律モ相立候上ナレハ、兎モ角モ只紛々タル央ニ異船迄モ相迫候而ハ、夫限之事ニ而 皇朝之命脈モ尽果候場合ニ立至り可申ハ案中ニ而、只々慷慨ニ堪兼残念之至ニ御座候、宰府

五卿之儀モ是迄之通、五藩<sup>江</sup>御付託トノ御沙汰モ御座候由、彼方モ 大山周旋之通五藩更ニ異議モ無之、未首尾之届ハ不承候得共、筑藩蒸氣船ヨリ五藩同行之談判相調候哉ニ被承、弥其通之運ヒニ成立候ハ、自然罷登リ候半、是ハカク運ニ被<sup>相</sup>成候半歟ト存申候、何卒是成共五藩同論不相変持張候様ニモ有之候ハ、少々一会桑之暴モ止候場合モ可有之哉ト勘考罷在候、

一肥後ヨリ去月山形典二郎御内使者トシテ被差越、三原彦之丞知己之故ヲ以面会致度申出差出候処、此節大山格之助ヲ以人吉<sup>江</sup>

塩相止候一條、並ニ人吉ヲ先ニシテ薩ヨリ襲被來候儀、逐一長谷川<sup>江</sup>相咄候付、則政府<sup>江</sup>モ申出候処、越中守様両公子政府

辺別而及心痛、薩肥隔意ヲ生シ候<sup>様</sup>姿事共、致到來候而ハ不相濟事故、精々其所相糺候様被仰下、段々手ヲ尽シ候処、芦小部

辺<sup>江</sup>止候様ニ而其後不相分、塩之儀モ決而相止候訳ニハ無之候得共、自然人吉<sup>江</sup>産物モ是迄八代<sup>江</sup>辺<sup>江</sup>出候モ、長崎又ハ米モ此

御方<sup>江</sup>相廻候付、段々是迄八代<sup>江</sup>出候品物減少ニ從ヒ、塩ノ入込モ相少相成候半ト申事ニ而、精々致探索候処、意有<sup>而</sup>右様之

訳ニ而ハ無之トノ事ニ而、兎角ニ委敷実情不申解候<sup>而</sup>ハ、此末此一事ヨリ隔絶之場ニモ成立候テハ大変之事故、兼而薩<sup>江</sup>知己

多キ者ヲ以、目話<sup>様</sup>テモシテ情事申解ヘキトノ評議ニ及候処、長谷川・山形之兩人ニ限り候由ニ而、山形<sup>江</sup>被申付、両公子方御

直御沙汰同様之向ヲ以御内使者被仰付、当人冥加ニ叶ヒ候位之事ニ而、則拙者又ハ君則辺關係之向<sup>江</sup>取<sup>取</sup>逢度トノ事故、本田弥太

郎・岸良七之丞兩人差出候処、委細申述、尚又拙者<sup>江</sup>不相逢候テ帰国イタシ候而、適々<sup>ル</sup>ハカハル參候詮モ不相立、此度趣意十

分申尽シ了解ニ及候テ、錦ヲ着テ故郷ニ帰ル場ニモ相当候間、是非面会致度申候事故、一会イタシ、尚委細趣意承候処、前文通風説ヲ以兩國之間離間隔絶ト被<sup>相</sup>成候而ハ、此世態不相濟<sup>ニ</sup>

而弥御懇意被仰通度、殊更丈之助様ニハ中将様御別懇之御事故、尚深是ヨリ別段之御親ミ被為在度、既ニ御内ヨリ御出之思召立

モ度々有之候得共、因循<sup>ニ</sup>而其事モ不被為果、御<sup>情被</sup>殘懷御思召、來春ハ是非御出之思召<sup>テ</sup>候、此儀ハ是非御閉日被遊度折入候旨

申出候間、拙者返答ニ成程是迄段々浮説流言モ甚敷、実ニ耳ニ堪兼候得共、於此方決<sup>而</sup>意ナキ儀故、不頓着<sup>ニ</sup>置候得共、此

節大山序ニ申上タル儀ニ而、甚以御氣之毒ニ存候得共、御情義御打明シ之儀ニ候得ハ、扣置候儀ハ出來兼有成候処申上度、畢

意窪田治部右衛門尊藩<sup>ノ為</sup>ニ有旧好之國恩ヲモ報度所存ニ而、日田之外御領込財ヲ絞リ取、尊藩<sup>江</sup>可差贈トノ所存有之哉ニ申触シ

候、物議モ隨<sup>而</sup>相生シ決而右様之訳ハ無之筈ニ候得共、寢<sup>寢</sup>田氏ニハ尊藩之好モ有之候付而ハ、兼而御親之訳モ有之候哉、尤寢

田氏ヨリ幣藩之者<sup>江</sup>相咄候趣モ致承知、此節於小倉森<sup>表</sup>小笠原閣老ヨリ天草<sup>江</sup>薩州押ヘトシテ尊藩ヨリ人数差渡<sup>被</sup>成候様、尽力

可致御<sup>被</sup>申聞候付、夫ハ以之外成儀ヲ致承知モノカナ、薩州之儀ハ兼而耳目ヲ入置候事承承届、決而右様之異存共ハ更ニ無之旨

相答申上候処、全ク薩之為計ニハ無之、浮浪之屯集スル場所故、是非人数差添<sup>渡</sup>候様周旋可致押而承知致、肥後ニヲイテ御請之儀

ハトテモ有之間敷、却而物笑ニモ可相成ナト被申付由ニ承伝候処、其後天草<sup>江</sup>人数御繰出<sup>被</sup>成候様ニト御承知之旨、森表通

ノ為御知迄モ有之候、其上弊藩御戒心之為諸方ニ人数御繰立、

日向<sup>江</sup>邊<sup>相</sup>モ御繰出被成候、カタ々以推考仕候<sup>致</sup>ニ何カ御勘考之旨  
モ可有之候、形之上ニ而ハ相見得居候得共、此方ニ而ハ一向不  
差構、是迄物笑ニ而打過居候、此節乍序不取敢御咄申上候ハ、  
御咄振モ可有之候申付置候、勿論何方モ同敷壯士輩ハ風説ヲ數  
聞伝、切齒イタシ候者モ不少、我々迄モ相迫り候モ有之候  
得共、上ハ勿論、我々共初其外要路之御役、等ハ無沙汰<sup>在</sup>ニ置、  
若又自然何トカ可承訳モ可有之存過罷出候、將又、近来ハ尊藩  
有名之御方ニトテモ御要路ニ相少ク、京師<sup>江</sup>ハ植田君<sup>江</sup>萬事御  
委任ト申様ニテ、一体此比ニ至リ候而ハ、御隣境之好モ何トナ  
ク薄口キ、其上御加兵之儀<sup>出</sup>ニ付以来尚又仰談度トノ御使者迄モ  
被差遣、悉ク相反シタル事而已多<sup>有</sup>之、此方ヨリハ一向相替  
候儀ハ無之筈之処、総而世之變遷ニ随ヒ、御所置振モ行違候事  
計ニ而、御親<sup>ミ</sup>之道モ何トナク薄ク罷成、兎角弊藩<sup>ニ</sup>而ハ道理  
ニ基キ、決而程能キ抔申様成儀ハ不致賦<sup>ニ</sup>而、当分ハ 朝暮散  
々不都合之儀<sup>哉</sup>ニモ承伝候得共、国論<sup>右</sup>致<sup>江</sup>一体居候、乍然、道  
ヲ以御隣交之御好<sup>ミ</sup>ハ此方ニヲイテ一向忘却ハ不仕、偏<sup>ニ</sup>朝  
廷 皇国之御為一筋ニ存亡<sup>込</sup>、タトヒ諸藩之物議ヲ受候而モ、真  
実道理之相立候処サへ踏失ス候得ハ、倒候トテモ更ニ遺憾<sup>ママ</sup>モ無  
之候賦ニ御座候間、此後弥 皇国之御為ト思召、情義ヲ以御交  
被下候得ハ、実以弊藩之渴望スル処、肥藩<sup>薩</sup>両国之力ヲ以天下ニ  
相立候ハ、 皇国内中ニヲイテ強国詔<sup>ハ</sup>本ヨリ、随分天下人  
心之帰スル処も隨而相生シ、 皇国ヲシテ海外ニ威武ヲ輝カシ  
候半ト存候得ハ、此上ナキ大幸ト存候間、仰キ願所ハ何卒此末  
同意一体之御懇志ニ被仰通度相答候処、別而相喜ヒ我元ヨリ願

所<sup>ニ</sup>而、此度ハ嫌疑之一端ヲ申解候為ニ罷出候処、右風<sup>様</sup>之事迄  
モ深ク致承知喜ヒニ堪兼、早速罷帰リ申上候様可致トノ事故、  
此方ニ而モ 御上<sup>江</sup>ハ勿論同席之外役筋<sup>江</sup>モイ細貴公御咄之趣  
御申聞有之様可致相答置候、就テハ拙者所存之処モ両公子又ハ  
政府<sup>江</sup>モ御咄被下度、弊藩<sup>甚</sup>ク存候者共ハ先監物君之御教戒ニ  
預リ候流レ之者モ不少、先監物君ニモ御在世格別御信用ニモ不  
相成、終ニ御他界<sup>ニ</sup>而于今、監物君ヲ慕ヒ候者共願所ハ、監物君ニ  
御懇意ニ被仰候御方々、其他當時有名之御方々要路ニモ御關係  
被成候ハ、弊藩御親云々御手初ハ此一筋ニ出候半ト存候付、  
何卒此趣仰上被下<sup>度</sup>ト申述候処、夫ハドフモ私ヨリハ監物同志之  
私ニ候得ハ、為申兼由之返答ニ御座候間、決而私ヨリ申上候事  
ニ而有儀<sup>成</sup>之処ニ而、仰上被下候而モ不苦筈ト存候間、是非此段  
ハ願候旨申述候処、夫ナレハ則申出候様可致返答ニ御座候、  
一人吉塩一條之儀前文通之事<sup>ニ</sup>而、此度此方<sup>江</sup>參掛諸所探索ニモ  
及候処、決而塞リ候訳ハ無之候得共、当分人吉モ至而繁花ニ成  
立人込モ多ク、夫故塩之入途モ多ク、其上産物モ諸所<sup>江</sup>散在イ  
タシ候処、右之通ニ御座候半ト申事<sup>ニ</sup>而成程之通ニモ候半、シ  
カシ産物之儀モ米ハ勿論諸品モ弊藩<sup>江</sup>入候モ有之筈、夫ハ御存  
之通り焼失以来之事<sup>ニ</sup>而、其折ハ尊藩<sup>江</sup>御拜借金之御相談モ為  
有之由之処、無理成御返答ニ及ヒ無拠此方<sup>江</sup>御相談ニ相成、夫  
ヨリ段々産物等モ相運ヒ基リ右様之訳ヨリ実ハ快カラサル訳モ  
有之候、カタ々致 産物モ諸方<sup>江</sup>散出之場ニモ候半歟、人吉斗  
苦メ可申訳モ無之筈<sup>ト</sup>ニ存候旨申述候処、夫ニハ頓ト一言モ無之、  
因循国之所業可恥次第、人吉ニ罪ハ無之事<sup>ニ</sup>而残念千萬ニ御座

候旨承候、

一 肥藩西洋各国遊学生十五人斗差出相成候吟味中而、最早相  
發候半ト存候旨承候、要路ヨリ出加候哉之旨承候処、決而要路  
加候場ニハ不至、多分初生共而庄村某辺ヲ頭ニ遣而之模様  
ニ御座候由、咄ニ御座候間、夫ハ実ニ結構成思召立而、弊藩  
ニ而ハ抜カケ之先鋒ト被成、各藩之説モ決同様ニ受候半ハ案中  
ニ而、天幕ニ対シ甚恐入候得共、実ニ當時天下形勢ハ基ヨリ  
外夷之情態トモ情致勘考候処トテモ、只今ニ而広ク海外夷狄之  
難ヲ交候半ニハ彼之実ヲ得ス候而ハ、国体ヲ初兵備之上ニ候而  
モ、我 皇国内中之狭小成見識ニ而ハ更ニ受答モ出来兼候位  
而、皇国興廢之輕蔑ヲ此上受候半モ難忍処ヨリ、断然ト憚ヲ  
モ不顧、カタク探索ニ及候処、大ニ目ヲ発キ候場モ不少、益  
武備充実ノ基ヲ立、微少ナカラ集成館精練所銃薬方千分一之基  
モ相立候儀ニ而、他ヨリ御伺候而ハ何トカ説モ可請事ニ候得  
共、真実求非アル所他ニ無之、心ニ一向恥無之候間、尊藩ニ而  
モ御同論ニ被成候ハ、御互ニ武備充実シテ 皇国藩屏之任ヲ  
兩國之間ニ相尽シ候ハ、随而有志ノ藩モ可有之存込候旨申答  
置候、

一 其外段々咄モ有之、頼ニ御国之事ニハ感心ニテ、我弊藩之因循  
残念之咄候甚多ク、実ニ此先生ハ正直成男ト被思得、殊勝成事  
共ニ御座候、最早イロク不殘御実底ニ申上、且數々之御咄共  
致承知、氣臆之有内ニ罷歸リ一部首終具ニ可申出ト差急キ罷歸  
申候、

一 五島ヨリ此節御借船之御札、且以來御家臣同様位之御親ミ被成

下度御願ニ而、段々候モ不少候、尤龍伯様御代ヨリ之旧キ御  
訊柄モ有之候付、カタク其程ニ御応以來旧近親様御同様之御  
約束ニ相成申候、

一 小倉ヨリ御使者此内大山等周旋之一條ヨリシテ、十月四日ニ  
又々長ヨリ襲来一戰ニ及ヒ、小倉勢呑春ト申所江籠居候得共、  
諸方之要害モ悉ク被取切防ニ無術、宰府江參、止戦之尽力致候  
只頼ニ御頼再三相断候得共、最早一戰ニ国家存亡ニ相係候間、  
何卒小藩微力ヲ憐ミ相救クレトノ事ニ而、トテモ断不被成処ヨ  
リ三雲藤一郎小倉之者同伴ニ而、長州之軍門ニ入止戦ニ尽力ニ  
及ヒ、当座可也之首尾相成候処、此度長州ヨリ幼君ヲ質ニ出候  
様申掛、トテモ被差出訊モ無之一藩死尽シテモ不相叶訊故、此  
方之御力ヲ以何卒程能御取成被下度申候付、成程尤之御儀ニ而  
御国情カタク不御忍訊ニハ御座候得ハ、此度長州御征討ニ付而  
ハ出兵之儀御断ニモ相成、殊ニ御互ニ趣意違候事故、一旦宰府  
出先之者ヨリ不得止事一己之見込ヲ以、止戦ハ尽力ニハ及候得  
共、トテモ国論ニテハ關係ハ出来兼候事故、此儀ハ御情愛ハ能  
ク相察候得共、其御無理之御相談ニ而、先御断申上度程能ク申  
断被成候、シカシナカラ長州ヨリモ無理ニ幼君ヲ取候考ニハ無  
之候得共、是迄イロ々々申処行違ヒ而已ニテ為申込訊ニ而、当  
君ハ他界被成候儀ハ相知レ候得共、矢張表通死去ニモ可相成姿  
ニ申成候、今此幼君コソ頼処之一人之主君ニ而、情義相察シク  
レトカ申様ニ実事ヲ明シ候得共、強而此様成儀ヲ申事ニ而ハ  
無之、右式故態ト為申込ト黒田木戸ヨリ咄之訊モ御座候間、  
萬事实事御明シ御断判ニモ被成候ハ、様之無理ハ決而申間



數、能々其辺ノ処ヲ相論候而、実事ヲ以歎願ヲモ相立候様ニ程能申論置候賦ニ御座候、

一 肥後ヨリモ右一條<sup>二</sup>付、小倉使者同伴<sup>三</sup>而御使者參、初肥後<sup>四</sup>スカリ類ニ歎願ニ及候故、肥後<sup>二</sup>而モ武門之習ヒ不被忍<sup>三</sup>詔<sup>四</sup>而、初メ止戰之事モ伊集院直右衛門ヨリ長谷川等<sup>五</sup>談合之詔モ為有之末ノ事故、此節之儀モ兩藩申談シ尽力致度トノ趣故、是モ同断<sup>三</sup>而御答被成<sup>相</sup>申候、右使者ハ村山得太郎トテ御奉行ト申、參政之場ノ立場<sup>二</sup>而重キ処ニ御座候由、

一 諸方ヨリ御使者続等<sup>三</sup>而甚御迷惑之事ニ御座候、此内ハ英船參、種子島破船<sup>シ</sup>御札アトミ<sup>テ</sup>ルヨリ使者差上申候、此一<sup>二</sup>條新納家ヨリ委細申越之含<sup>二</sup>而相略申候、

一 去<sup>三</sup>十月廿五日開成所<sup>四</sup>出席致承知居候學則規則相達候、其上御達ヲ以拙者ヨリ教授<sup>三</sup>相達候ハ、此規則相達候上ハ能ク行レ候様無之候而ハ不相濟、不行ハ掛役<sup>二</sup>教授師員之罪行フ不能ハ初生之罪ニ候得ハ、若此末規則ヲモ破候半ニハ夫<sup>二</sup>所置モ不致候而ハ、不相叶事故、前広此段ハ相達置候付、其罪甘シテ受候様達置可申委敷相達候処、翌日師員田中俊造ヲ初諸生十九人谷山<sup>三</sup>出張、此内届無届等モ有之候、田中ニハ相頼段相断タル由候得共、甚以心外成次第故、早速出勤扣サセ置候処、イロク々申立候得共、一<sup>二</sup>出<sup>三</sup>不取揚、田中ニハ訓導師ニ被仰付置候付差免、当分集成館書籍取調方<sup>三</sup>申付置、諸生ハ一統差免置申候、此段ハ入込候事故、大略迄申上候、

一 集成館ニモ最早追々出来之賦ニ御座候、  
一 集成館<sup>三</sup>締器械方<sup>四</sup>大島白糖方機械者交代之者一人、語學者一

人、菜園作一人、都合三人英人參居、語學者並<sup>三</sup>菜園作ハ一向不相分込入申候、此段ハ決而新納氏ヨリ御申越<sup>二</sup>而モ可有之、相略申候、

一 締器械<sup>三</sup>集成館本鑄物方跡之賦ニ御座候、  
一 英人住居ハ龍洞院跡<sup>三</sup>作立之賦ニテ当分精々取立ノ賦ニ御座候、尤折向<sup>三</sup>掛<sup>四</sup>而精勤御察可被下候、  
一 使節船モ去月<sup>三</sup>追船<sup>四</sup>而首尾好出帆被成申候、何モ鈞<sup>三</sup>合能仕合<sup>四</sup>ニ御座候、香港モ去月廿一日出帆之筈ニ御座候間、是以都合能相運<sup>三</sup>候半、未左右モ無之候得共、不遠左右モ有之候半ト存申候、

一 右三人之英人モ右使節船便ヨリ延着相成申候、  
一 得ト御談合申上候上ニ奉伺筈御座候得、岩下氏<sup>三</sup>申談候処、至極同論之事故、我々共御役料三百石丈差上仕候、跡越ニ申上候ハ甚以不心候得共、能々御含取被下度、御役料定之儀モ吟味

モ有之タル事ニ候得共、余リ細微ニ過候様ニ有之候間、此度段々至吟味表通問合被成候通ニ相問申上候間、何卒左様御心得可被下候、是迄御銀被下候御役場モ似合ニ御役料米被成下候ハ、御役進退之事モ致易ク候半ト致吟味、兎角御出目ニモ相掛事故、我々共御役料差上候而、可然ト存込候処ヨリ相伺候間、左様思召可被下候、

一 長州御返使者トシテ木戸並<sup>三</sup>川南始ト申側近之者耆人ヲテンド<sup>四</sup>さまヨリ參、当分ハ中將様御膝中之事ニ候得ハ奉願御目見被仰付、御口上等御直ニ申上、木戸<sup>三</sup>御刀一腰・銀五枚・紺白細上布二反、一人<sup>三</sup>御脇差一腰・紺白細上布二反・銀三枚被成下候、御進物ハ御両殿様<sup>三</sup>袴四枚<sup>四</sup>細<sup>五</sup>御注<sup>六</sup>被成下ノ事・羽二重五疋

之外産物等相添御遣候付、塩硝一万斤相遣申候、

一 一夕種子ノ浜屋敷ニ而、諏訪家・伊地知・黒田・本田・三雲等  
出會、御酒被下候場ニ而一會ニ及候、

一 一夕客屋ニ而、西洋料理ニ而右人数ニ刑部事<sup>殿</sup>帰国ニ相成候間、  
取會申候、

一 上瀬集成館之外拜見、

一 精練所拜見之節ハ平作<sup>佐</sup>飯屋借受、本田・三雲之外取會折田要藏

ト申咄相手ニ出候処、種々様々一興ヲ促シ大ニ馳走ニ相成申候  
由、此日拙者ニハ出會不申、吉田虎次郎ナトハ極懇友之咄振ニ

而、当人被捕ハ吉田ト一緒之咄ニ而、兼而意通之趣ニ御座候

由、二條城之広言ハ専長之為閣老<sup>江</sup>説得之咄ニ申成シ、余程興  
ヲ成シ面白キ一會ニ御座候由、石流之木戸モ我ヲ折候位ニ御座

候由、御推計可被下候、

一 山階宮初御出閉後ハ何様之事ニ相成候半ト深ク心痛之次第、ト

テモ当分ニ而ハ能キニ趣候儀ハ千萬有之間敷、弥朝廷之御衰弱  
相極、残念千萬數百里相隔スル堪兼候次第、眼前御見聞之上ニ

而ハ嘸ト致推計候、御伝言之通如何御尽力候共、動立訳モ有之  
間敷、兎角遠大之目付ヲ以其時ヲ御待被遊外ハ無之トノ思召、

至極御尤ニ御座候半、シカシナカラ、朝廷無究之御危難モ被  
為趣候様之儀<sup>共</sup>モ到来イタシ候ハ、徒ニ相過訳モ更ニ無之筈ト

ハ存候得共、トテモ微力之一會桑辺ニ而格別之慕ハ募リ申間敷、  
既ニ揚兵之御評決迄モ為有之候由、何分此方ヨリハ愚考之不及

処ニ御座候得ハ、何卒至当之御評義ヲ以カタ々進退御尽力之  
処、幾重ニモ乍御苦勞為國家奉祈候、尚申上度儀モ御座候得共、

相略申候、時分柄隨時御保護國家之為ニ奉祈候、寒中御尋問旁  
申上度如斯御座候、乱毫失敬御海容奉仰候、恐惶拜具、

十二月七日

桂右衛門

小松帶刀様

閣下拜呈

五年不詳八月十二日

小松帶刀宛

(東京大学史料編纂所所藏)

尚々再見モ不仕候間、脱文等モ可有之候得共、宜敷御賢覽可

被下、中浜萬次郎御暇一条之儀奈良原<sup>江</sup>相含御座候付、宜敷

御勘考被下度御頼申上候、トテモ此節ハ止候場ニモ至リ兼、

止候而モ為指御委任相成程ノ事モ当分無之、平運丸モ当人申

出之趣モ有之候得共、当分ニテハ其通ニモ參兼候間、兎角手

透ト可相成ハ案中ニ御座候間、宜敷御勘考可被下候、

翔鳳丸長崎ヨリ去ル七日致帰帆、貴翰相届致復詠候、未去兼候残

暑ニ御座候処、中将様御機嫌能被遊御座、其上御煩モ日々御順快

被遊、一同恐悦奉至慶候、於爰許御方々様被為揃御機嫌能被遊御

座、是亦御同慶奉存候、随而貴君御壯剛御奉職奉大悦候、小子碌々

トシテ在務罷在候間、乍憚御放慮可被下候、

一 爰許更ニ相變儀モ無御座候、御安心可被下候、

一 御地モ更ニ相變儀モ無御座候由、先平穩之形ニテ仕合ニ御座候、

長防御所置抔モ全ク其儘被召置候由、甚残念千萬ニ御座候、只

今形ニテハタトヒ京地ハ何モ差置、長防士民ノ情何様ノ挙動モ

難計此末ノ処、別テ不容易場合ニモ可能成哉、上下彼是御苦心ノ程、奉推計候、可成ハ、皇国ノ為干戈ニ不及、一新ノ御処置有之レカシト掛而奉祈候、一戦ハ難クシテ易ク後ノ御所置ニオキテ其六ヶ敷儀ト深く心痛仕候、扱土州之後藤報告モ未無之由、如何之模様ニ御座候半、六ヶ敷儀ト存申候、佐賀辺ハ未タ何ノ手モ出申由、適々出掛而之処、引込モ出来兼可申例ノコビリニテ相済可申哉、笑止千萬ノモノニ御座候、

一 此節御書面ニテハ其後全ク相変儀モ無之由ニ致承知、此末何様ニ変候半モ難斗、就而ハ先便ヨリモ申上候通、諸郷出兵人数モ随分練熟ノ形ニ相見得、別而仕合ニ御座候、最早三十日計ニモ相成急速ノ出兵故、一統用金モ此方ニテ尽果、籠手袖バッチ杯モ漸ク一揃外出来不申、最早昼夜着通シニテ、別テ相痛困窮ノ模様ニモ被相聞候付、不被計形勢ハ奉察候得共、自然只今通数月延曳ニモ相及事候得者、右ノ次第ハ早々為御知越被下度御頼申上置候、眼前ニ責弊困窮之姿難忍御座候、兎角今成長滞留ニテ召置事候得者、イツレノ筋歟道ヲ付不申候テハ不相済儀ト存申候、此段ハ御聞置可被下候、

一 翔鳳丸之儀ハ何様ノ事モ難計候付、此方<sup>江</sup>御留置候様、分テ被仰越候趣イ細承知致候得共、長崎御拂前期限ノ金筋段々有之候通、此度佛注文御拂込金筋手当ニ付、ポフトエン方エイチ、壯之丞ヲ以相談為致度趣ハ申上越候通ニ候処、何分御拂前ハ過分ニ相屯居候上之事候ヘハ、容易ニ請合候訳合モ無之候得共、兼而ノ懇切ニ依テ大島白糖代振向、壹ヶ年十萬枚ツ、利足相添返金之筋相談出来、別而都合能ク相連ヒ一難事ハ是ニテ相解キ実

ニホフトエン懇切ハ于今不始事ナカラ、此節モ分テ彼ヨリ申ニハ必ス荒ヒ金ツカヒハ、以後ハ念入候方可然トノ事ニテ其上五朱利ニテ相談出来申候、尤三十萬枚ノ借用ニテ八萬枚ハ置付ニイタシ、是迄借用別テ拂切ノ賦ニ談判イタシ候付、続金ノ手都合彼是差繰ノ訳モ御座候付、大坂迄是非不差越候テハ長崎表御拂、且借用方モ致画餅候テハ如何敷御座候付、御示聞候通、於此方候テモ軽重校計、聊疎略ノ取計ハ不致賦ニ御座候得共、不得止事上坂取計申事ニ御座候、尤向違ヒニ被差出候儀ニ候得ハ、決テ右様ノ計ハ不仕外ニ策モ相立可申候得共、廻路ノ航海ニ御座候間、右通取計候付、不悪様御汲取可被下候、返ス〜モ長崎表御手当金ハ至テ能キ都合ニテ御互ニ仕合御安心可被下候、

一 大坂表<sup>江</sup>本込銃三百挺丈御手当被成居候、右三百挺ハ持越ニ不及様被仰越、別<sup>而</sup>仕合ノ事ニテ此方鉄砲繰モ宜敷折カラ、長崎表ヨリ江戸廻柴山御手ヨリ相届、尚更挺数モ相重ミ至テ大幸之事御座候処、此節便ヨリ右大坂御格護本込三百挺ハ諸人申請被仰付、繰越御取入相成候ハ、鉄砲数モ相重候トノ御吟味ニテ御尤ノ御儀ト存申候得共、此節御手当人数<sup>并</sup>御城下諸隊ニ漸ク賦付出来候位ニテ、本込<sup>并</sup>御廻シノ三百挺ニテ当座此也之<sup>〔衍カ〕</sup>之間ニ合候賦御座候処、惣テ此方ヨリ持越候得ハ、全ク三百挺丈ハ御城下御旗本御手当一大隊之不足ニ相成賦御座候付、頭ヨリ甚及心痛精々長崎表ニテ御手当ノ処、手数ハ相尽候得共、御金ハ全クノ拂底何様トモ難致、鉄砲丈ハ先当座此也ト存居候折カラ、右通ニテハ大ニ目当及相違、如何共致様無之、太守様御旗本ハ全ク空ト相成、出兵ニ取扱候後之人情モ中々イタシ様無

之、就テハ三百挺申請相成候、人数ハ自筒ニテ是非々々三百挺  
丈ハ御地<sup>江</sup>格保護被成候様遮<sup>テ</sup>御頼申上越候、此一事第一之御  
手当ニテ、夫故尚更翔鳳丸モ再揚帆申渡事ニ御座候、海軍方モ  
此節一隊出兵被成候得ハ、跡ニハ僅ニ二十挺余リ相残リ候賦ニ  
テ、是モ則ヨリ申出如何可致哉ト甚心痛ニ御座候、乍併、御地  
ニテ三百挺丈御備置被下候得ハ、少々宛取合セ何様トモ当座ノ  
指繰ハ可致候間、左様御心得被下候テ返ス、モ九度々々數御  
座候得共、此段ハ何卒宜敷屹ト相備候様、御吟味被下度御頼申  
上候、

一此節岩下氏帰朝<sup>ニ</sup>付、モンフラン<sup>并</sup>佛人都合十一名参着ノ儀ハ、

先便ニモ申上候通御座候処、既ニ近々来着之模様<sup>ニ</sup>付、段々御  
手当等ハ被付候得共、是迄モンフランノ懇切ハ御聞及通之事候  
得共、段々不審相生何分ニモ深意不被計、其上各国之復轍<sup>ママ</sup>モ有  
深入イタシ候而ハ、御拂前等約定通参兼候ハ、却テ後難モ可  
有之トノ趣、長崎表ニテモ米人等ノ説モ有之、殊ニ此節英諸生  
中ヨリイ集院左中・大久保一藏方<sup>江</sup>申遣候趣モ有之、甚以念遣  
敷御座候付、段々評議ニモ及候処、本ヨリ中将様御在京中、其  
上 太守様ニモ近キ御上京之賦ニテ御国内混雜之折カラ、トテ  
モ来着相成候テモ不被濟事候間、於長崎表致談合度直乘ニテ当  
所<sup>江</sup>参候テハ甚不都合故、上海迄五代差遣、長崎之様可参致都  
合新納家出崎之賦ニ御座候、勿論イチ、壯之丞罷帰候付、是モ  
付差越申賦ニ御座候、先度ヨリ申上越候通、海陸軍士官之儀甚  
不都合故、断切之筋ニ御決定相成、右ハ本ヨリノ約束ニモ無之  
故、新納氏五代等相断候賦ニ御座候、尤其外之処モ先一緒ニ相

断候方可然ト申談置申候、何分ニモ参掛之事故、六ヶ敷談判ニ  
御座候半ト存申候、就テハ商社與合之儀モ行レ立候儀ニモ無之、  
当分ニテハ参兼可申哉ト存候付、是モ追テ御断之方可然哉ト存  
申候、右付テハ第一違約之場ニモ相当候得共、向ヨリ使節一條  
<sup>并</sup>商社取組モ幸ヒ道モ全ク不相付候間、十分此方ニテモ勝ハ  
有之事候間、夫ニハ聊差支ハ無之賦ニ御座候間、此辺之処迄モ  
ドフカ此節能キ都合ニモ参候ハ、至テ仕合ニ御座候得共、爰  
ニテ差向候テノ事ニハ参間敷ヤト存申候、大略ハ奈良原<sup>江</sup>申含  
置候付、御聞取可被下候、只今相成候テハ西洋ノ事実不明故、  
甚恐敷御座候、尚々前文申上候通、否可申訳合モ有之間敷、本  
ヨリ新納氏五代等初ヨリ相心得居候訳柄ニテ、新納氏ニハ決テ

心配ノ訳トモ不被存候間、程能ク可参申哉、勿論參上ノ儀ハ御  
上京中殊更日本ノ形勢カタ、相当ノ処ヲ以、御申聞賦ニ御座  
候、岩下氏出帆モ十日計延引ノ由御座候間、自然廿日過ニモ可  
相成哉ト存申候、追々模様ハ申上越候様可致候間、左様御心得  
可被下候、就テハ何分六ヶ敷申立候事候ハ、別テ難事ト存候  
付、模様次第ニハ誰ゾ御見合ヲ以、一人モ御差下シ候都合モ可  
有之候間、兼テ御含居可被下候、

一 中浜萬次郎ヨリ御入手ノ航海書上梓糺合方ノ儀、早速中浜方<sup>江</sup>  
相渡置候付、相濟次第ニハ更ニ差上候様可致候間、左様御含居  
可被下候、

一 先便申上候半ト存候得共、為念申上置候、人吉ヨリ御一門相良  
美作御使者御差越、屋敷御借渡ノ御礼<sup>并</sup>御部屋住<sup>江</sup>御迎ノ武之  
進様此方<sup>江</sup>米良家同様御遊学トシテ御出相成度御願立ニテ其意

二御座、当月末来月初方ヨリ御出候賦ニ御座候、別テ御懇命ニ被成度トノ思召ニ御座候、イカニモ御殊勝ノ御事ニ御座候、就テハ御使者エハ御目見得等被仰付、難有カリ罷歸候事ニ御座候、米良家<sup>江</sup>老<sup>ケ</sup>月ニ米老石ツ、飯料用トシテ御扶助相成候処、右之御礼モ厚ク同人ヲ以テ御使者ヲ以被仰進候事ニ御座候、將又、預リ置候米良益三儀此節美作召列婦リ所置相付候上、再遊被仰付度申出候間、其通相応此節同人列婦ニ相成申候間、別テ仕合ニ御座候、初ヨリ得能良介請合致世者ノ事候間、其段御達シ置可被下候得、能ニモ大悦可仕哉ト存申候、未毫相成候得共、御達シ置可被下候、

一奈良原幸五郎儀被仰越趣有之得ト及評議候処、イツレ此節柄徒ニ罷在候訳モ無之、初重留參謀之儀ハ黒田<sup>江</sup>被仰付置急速之事故、右ノ通取計候処、兩人ニテハ却テ不宜訳柄トハ乍存、イツレ多人數御引請ノ事候得ハ御大任ト存候付、被相添候テモ可然申談、尤黒田ヨリモ歎願ノ訳モ御座候付、初メ御軍賦役<sup>江</sup>被仰付、所謂因循ノ御取扱ノ様御座候得共、順ヲ候方却テ可然被存候間、其後頭取被仰付候儀ニ御座候、就テハ木藤角太夫罷歸候後、誰モ不被差下事実迂遠ニ罷成候付、先度ヨリ誰力御差下候答ト相符居候得共、只今ニ押移甚事情モ不相貫、御軍賦役ヨリ類ニ誰力御差登セ相成度申出候付、奈良原罷登候ハ、カタク可然ト申談、翔鳳丸乗船ニテ上京被付候付、爰許之形行事実不申合外モ委悉御聞届被下度御頼申上候、決テ当人ノ議論モ有之筈ニ御座候得共、何ソ異論有之訳ニモ無御座、得ト是迄相咄置候趣共、御聞取可被下候、

一諸生再遊取調之事甚心痛此事ニ御座候、初申渡通、精疎ヲ以被差出候筋ニハ相達度候得共、現事取調ニ取掛候得ハ決テ勉強ノ者ト乍申、現事ノ試業ニ相成候テハ其通ニモ參兼、少々熟達ノ者ハ勘弁モ却テ有之、無暗ノ者ハ必ス不勘弁ニ申出、心配不一形多謀中余計ノ事ニ隙ヲ取ラレ候様ニ御座候、適々被仰越候者共モ勉強ハ為致筈篠崎ヨリモ申遣候処、其通ノ事候得共、此度少シク仕損候得ハ本ニ復シ可申、能々吟味者ト只今迄モ指置、不平ノ者モ不少筈御座候得共、此節ノ如キ諸生失謀ニ及候テハ御名目ニモ相係、甚残念千萬、其上未婦參無之者モ御座候付、精々手ヲ付置候者モ御座候、尤此節長崎ニテ英人ヲ殺害イタシ候一条モ至テ六ヶ敷由御座候付、以来遊学モ人柄專一ノ事ニ御座候、就テハ再遊ノ処モ開成所<sup>江</sup>尚又吟味致候様申渡置候、兎角治定通二等諸生ヨリ被仰付事候得ハ、二等迄相進候者ハ決テ人柄モ全躰乙名數者共ト存候付、其通ニモ此節ヨリ可被仰付哉、前田十郎左衛門儀ハ全体乙名數者故、聞入モ宜敷相見得候得共、榊ハ至テ一向ニ申出只世話敷毎度同シ歎願而已承飽果申候、堀口モ同断貴君御付書ヲ以被仰越候者ハ、速ニ相運ヒ候心得ニ罷下り候故、中々面働<sup>マ</sup>ニ御座候、堀口ニハ随分勉強ト申事候得共、佛学余リ出来候模様ニモ相見得不申、其上此節願出候趣向ハ少々諸生ノ向トハ木口モ相替候故、是亦別段ノ処ニテ向ヲ替御差出被成候テハ、外諸生安心モ出来申間敷、前文中上候通、兎角精疎ノ調ハ試業ノ上ニ御座候得ハ現事都合參兼、甚込入候次第、爰ニテ一人不平ノ調モ御座候得ハ、現跡ハ空敷罷成申候、階級ニテ被仰付事候得ハ更ニ論モ無之、御所置振モ最安ク、私

内存ニハ漢洋医其局々ヨリ此涯階級ヲ以十人ツ、交代ニ被差出候様ニ御座候得ハ、成功モ早ク御費モ相少ク候半、尤此節再遊相成候得ハ、一ヶ月一人扶持ニ金五両計ツ、モ不被成下候テハ難相濟候付、其辺ノ処尚又吟味モイタシ度御座候付、得ト御勘考モ被下度、尤右之趣ハ仰出ニテモ此涯ハ屹ト被仰出、至極向々人柄取調候様被仰付候方可然哉、当時勢甚因循固陋ニモ御座候得共、御改革ノ御時節歟トモ奉存候間、御評議ノ趣モ致承知度御座候、所謂大功ハ細謹ヲ不顧ノ弊不少、生質又高遠ニ變萬里ノ波濤モ此隣ノ如ク相成居候得ハ、中々不相渴趣向モ生シ此末難制大害ニ御座候、右イ細ハ奈良原<sup>江</sup>申含置候間、御聞届可被下候、

一 翔鳳丸出帆ニ付空船ノ事御座候付、番兵ニ小隊乗船被仰付、此度被差出候筋ニ御座候、イ細ノ儀ハ態ト不申上候付、是又初中後ノ形行右同人ヨリ御聞届可被下候、

一 翔鳳丸ノ儀ハ被仰越候趣モ有之候付、前文通ノ事時機ニテ無拋出帆ノ筋取計申候付、長崎期限通無相違様、出帆被成候様御取計被下度、最早着船ノ節ニモ相成候ハ、又模様モ振替候儀モ難計御座候付、自然緩成向ニモ御座候、米運送ノ儀モ古米ト相成損失差見得申候間、其辺ノ処ハ御地ノ時機相当ノ処ヲ以、被仰付度御頼申上候、

右ハ相洩候儀モ可有之候得共、先ハ荒増ノ形行乍每不行届<sup>面</sup>已御座候得共、宜敷御汲取可被下候、先ハ時季御尋且貴札

ノ御報告カタク如斯ニ御座候、恐惶謹言、

八月十二日

桂右衛門

小松帶刀様

参人々御中

追<sup>面</sup>御面働ニ御座候得共、町田家閑山家ノ外<sup>江</sup>可然御伝達可被下候毎モナカラ、取込其不行届ノ儀共御陳謝可被下候、町田氏ヨリ為替一条ノ儀分テ承候、形行ハ御勝手方<sup>江</sup>申渡、折角統方ハ無油断取計答御座候得共、何分拙々ノ御佛難渋ノ事故、取分候儀モ如何ト存申候、シカシ等閑ニ差置候儀ニ無御座候間、左様御心得給候様御伝声可被下候、イツモナカラ返報ニモ不及不埒千萬ニ御座候間、幾重ニモ宜敷御伝可被下候、

六 文久二年十一月 何某宛

(大久保利通関係文書二)

尊書被成下謹<sup>面</sup>拜見仕候、嚴寒之御御座候処

尊体益御機嫌能被為遊御座候、乍恐奉恐悅候、然は此程為御使者尊地へ罷出候節は御前<sup>江</sup>被召出厚御懇命奉蒙、其上種々拝領物等御手厚被仰付身ニ余難有仕合乍恐奉拜謝候、扱此度

朝廷<sup>江</sup>御召ニ付御上京一条被仰下趣一存之御答も難申上、大隅守様<sup>江</sup>相伺候処、思召通來春御上京之御運ひ相成候<sup>面</sup>も、決<sup>面</sup>御不都合杯と申儀は更<sup>ニ</sup>被為在間敷、兼<sup>面</sup>御互<sup>ニ</sup>被仰談御勤 王之御至情も厚御汲取被遊候付、御引請御世話被為遊度

勿論

修理大夫様御在京中之御事故、猶又被仰越候付、聊御懸念被遊間敷可申上置旨承知仕候付、其通御心得被遊度、猶委細之儀は林田

量平二示談仕置候間、御聞届被成下度奉拜願候、京都表之事情も粗相分右等之儀も同人三言上相成候様申談置候付、是亦御聞取被成下度、実三皇国時運挽回之節と大慶仕候、旁御安心可被成下候、蒸気艦船帆之儀は折角相待居申候得共、未相分不申、甚不都合之次第と恐入苦心仕候、筑前丑郷御歸路三付御迎船御用二も相成、右時宜無抛御船繰之処、彼是と延曳仕、御氣之毒千万奉恐入候、此分恐至極奉存上候得共、任御沙汰尊翰之御答迄拜呈仕候、不敬之文言等多罪御宥免被成下度奉拜願候、頓首再拜、

桂右衛門

十一月

久武花柳

七 慶応元年十二月六日 島津求馬・伊集院左中宛

(忠義公史料第三卷)

一筆致啓上候、余寒殊之外強、難堪御座候処、御両殿様其外様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候、次ニ各様御揃御安寧御精務、珍重奉存候、於爰許御邸中至極ノ静謐ニテ、当分ハ病疾等モ無之、仕合ニ御座候、扱拙者ニモ不相替元氣、毎勤罷在申候間、乍憚御放念可被下候、長崎表着船以來、折角差急キ出帆ノ賦御座候処、粗夷情承候趣モ有之候付、何分難差置、然ル折柄ガラバニモ横濱ヨリ帰崎ノ様子承候間、此方へ得ト承届候ハ、巨細情実モ相分リ、新説モ可有之申談、御国へ嫌疑ノ廉モ致説得候ハ、旁々可然、右之趣共程能断判ニ及候処、彼ノ方ニテモ大ニ安心相成仕合ニ御座候、右始末巨細言上ノ道、野村宗七罷歸候

様申付置候間、最早疾ニ御聞通罷成候半、就テハミニストル御国へ鳥渡乗込度トノ事許、チト当時柄嫌疑モ有之、如何敷存候共、右ノ形行申上越候ハ、御賢慮モ可被為在、不容易詔合ニ御座候得共、漸ク夷情モ安シ置候上、又々破断ニ相成候テハ、入り入儀ニ御座候間、程能キ御所置被為在度、シカシ折能岩下氏出府ニ付、彼ノ方ニテ断判相成候ハ、其儀ニモ不及相済可申哉ト申談置、右式無抛儀弾取、甚出帆モ及遅引、如何之至御座候得共、難捨置次第二御座候間、宜敷御汲取可被下候、彼ノ地去十二日出帆ノ処、冬ノ海ニハ海上モ珍敷平和ニテ、十六日八ツ過大坂川口ニ着船、一日致滞留、長崎表御払前及過分拾万兩丈御借金相成度、伊地知御付人ヨリ類ニ歎願ノ事候間、留守居へ申残、当分ニテハ随分御請モ出来可申トノ見込故、正月三ツ日相立申込候ハ、可然申出候付、其通達置候、右ノ次第ハ伊地知歸府之節、御聞取可被下候、十九日爰許到着仕候、扱被仰付候 御趣意、最速打寄演舌イタシ候処、一統異論無之、恐入承知仕候間、此段御安心ノタメ、乍荒増申上候間、

御聴ニ相達候儀共、宜敷御頼申上候、江戸表詰人数御引払ノ一条ハ、彼表事實貫徹不致候上、央ヨリマチノニ相成、其節関係ノ者ノ内罷下候得ハ、決テ御掛念ノ廉モ薄ク、御安心ニモ可相成候処、其篇ノ処行届兼、当方ニテ委敷承候得ハ、時機相当之様ニモ相聞得申候、此節上村休介罷下り候由、委細御届申上候半ト奉存候、当分過激ノ論モ成程一応ハ世上ノ議論ニ依テ、庄中ノ談ハ為有之筈ト被相考、壯士暴生ノ枝葉ニ涉リ候テハ、能キ事ノ様唱成シ候儀カト被察申候、右様ノ儀ハ折角念ヲ入 御深慮ノ趣、一統

万々恐入拜伏ニ御座候間、頓ト安心イタシ候、当地ノ形勢未タ能ク相分兼候得共、得ト承候得ハ、決テ掛念ノ訳モ無之、相隔居候得ハ、何カ一物異論モ有之ソウニ被思候儀ニ御座候、御人数引取之儀、当分ニテハ日々変態イタシ、全ク見留モ付兼、当御邸只断然ト手ヲ引相守居候処ヨリ、各藩薩ノ動靜ヲ伺ト言様ニテ、長州御征討ニ付テモ、小藩タリ共少シモ不相応、大二策ヲ失シ、頻ニ一・會ヨリ無媒策ニ落サレ候トノ幕情ニテ、夫故一向幕府ノ奸策モ、一門不被相行、布テ内乱ニ相及、既ニ一橋ヲ落付策モ良相立候様子、此末必ス混雜ヲ引起シ可申案中ニ御座候、過日柴田藤五郎ヨリ申出候趣モ有之、一橋へ小松家御召相成、又会津ヨリ頻ニ相会度杯、様々手ヲ廻シ、小松家ニハ先日取合相成候処、至極相喜ヒ、合掌シ相謝候位カタク、思ヒ合候得共、奸策ニモ無之、幕ハ勿論一・會辺ニ於テモ策ナフシテ、実ニ尽力ヲ願ヒ候形ニ相見得、御兩殿様御上京テモ有之候得ハ、三代以前之旧制ニ復、大坂川口迄御出迎テモ相成、御信義ヲ御尽シノ治論相成居トノ説ニ御座候由、其外小藩等ハ追々依頼之筋ニ御座候、右ノ件々ハ、外々ヨリモ申上候半ト存候間、致省略候、夫故御人数ノ儀ハ、今暫時ハ見合置度、一統ノ吟味ニ御座候、此段宜敷御取成置可被下候、肥後モ国論相変、是迄当地詰ノ留守居植田休兵衛ト申者、此度追下サレ、是迄之周旋甚不宜、只會藩之論ヲ信シ候トテ、大ニ議論相立候様子ニ御座候、此度柳川藩便舟相願、右ノ者共ヨリ承候得ハ、十時攝津肥後へ使節ニ相立、君候ト丈之助公子トノ間、此比何トナク情義隔絶ノ形ニ相見、御和熟相成度、植田ヲ御呼下シニ、二ヶ条申込相成候処、疾ク二ヶ条共相決居候付、少モ掛念

ニ及申敷、返答為有之由相断ニ付、則承合候処、兩三日跡打下サレ候由、カタク、面白キ形勢ニ推移、能キ仕組ヲ見可申ト笑談イタシ候、伊勢殿御暇モ先ツ暫時見合相成度、当分ノ人数被召置候得ハ、御屋鋪取締モ、小松家外宿ヨリ掛テ行届兼候訳モ御座候付、是モ先ツ暫時見合候方可然哉ト、小松家ヨリモ頻ニ承候間、左様御心得可被下候、私ニモ最早御用モ無之候得共、来月末迄致滞留候ハ、長州一条モ何トカ相分可申、西郷ニモ此度ハ暫時成共、同伴ニテ罷下度談置候付、カタク、爰許ノ模様モ見合候儀ニ御座候、藝州表出張ノ大小監察モ、兩三日跡罷帰候由、儘ニ断判ノ次第モ不相分、専程能為相濟哉ノ風説ニ御座候得共、又一説ニハ愚弄セラレタルトノ断モ有之、至極秘事ニイタシ候模様ニ御座候間、迎モ十分ニハ出来中間敷被相察申候、尚爰許ノ事情委敷申上度御座候得共、着涯未何モ能ク相貫キ不申、乍荒増承得候形行申上置候、恐惶謹言、

十二月六日

桂 右衛門

高津求馬様

伊集院左中様

其外様

尚々此近日風評、閣老御国へ使者<sub>江</sub>相立トノ断モ有之、出所モ不慥、全ク風聞カトモ存申候、シカシ柴田ノ断ニ御上京ヲモ相計候ハ、書翰共ニテハ不相濟、使節テモ差立不申候テハ難叶杯ノ断モ、閣老辺ニ為有之候トモ申事故、右咄杯ヨリ右之説モ申触候哉、只今承候迄ヲ、虚実ニ拘ハラス申上候間、御汲取可被下候、以上、



別啓、私事別段 御伺モ不申上置候得共、先般攝海へ異船致渡来  
不容易御場合ニ付、早々被遊 御上京、

天氣御伺之御用意迄モ相成居候得共、速ニ致退帆候間、此節被差  
出御伺相成候筋ヲ以被仰上、可然申談既ニ今日相勤答ニ御座候、  
尤諸藩モ追々罷下候由ニ御座候間、此段達 尊聽候儀共宜敷御頼  
申上候、以上、

八 慶応元年十月二十六日 伊地知壯之丞・市来六左衛門宛

(忠義公史料第四卷)

尚々伊地知氏ニハ、長崎表万事御世話相成、深々御礼申上候、

今時分ハハルハ御滞崎中ト存候得共、書状相達候時分ニハ

御帰府候半、長崎表カタハ之御周旋如何ト存申候、帰国之

御ハ、又々暫時滞留之含ニ御座候、爰許安楽ハ誠ニ無此上、

殊ニ外宿故何事モ自由御推計可被下候、皆々出京相願ヒ候モ

尤ニテ、思ヒ当リ候位ニ御座候、

一筆致啓上候、余寒却テ弥増難凌御座候処、弥御壮榮御精務奉珍

重候、然ハ拙者ニモ無異糸罷在候間、乍憚御放念可被下候、長崎

表十二日出帆、十六日川口<sup>江</sup>着船、一日滞留、十九日致到着、御

用向モ程能演舌イタシ、何モ如才無之、当分爰許之形勢モ日々相

變、既ニ人数御引取之治論モ有之候得共、只今通ニテハ、先御見

合可然トノ事ニ御座候、幕ト一・會トノ間、嫌疑類ニ相生シ、此

度進発モ専兩候ヨリ強テ申上候付、不得止事、進発之場ニ相成候

処、応スル藩モ無之、孤立之勢ヒニテ頓ト致方無之、長州糺明モ

未慥之事モ不相分候得共、存分參兼候哉、大小監察モ兩日跡引取、

別説ニハ兎モ角モ尾ヲ取候トノ説モ御座候得共、至極秘事ニイタ

シ居候由、左スレハ如何ト相考申候、当分ニテハ全ク一・會之為

愚弄セラレ、無謀ニ落入、頓ト手ノ下様無之処ヨリ、柴田藤五郎

ヲ以調和ヲ計、一橋ヨリハ小松家御召相成、會藩ヨリハ類ニ取會

度ナト申テ、兩日跡小松家ニハ出會被成、合掌シテ喜ヒ候位ニ御

座候得ハ、余程御勢ヒモ張レ、尚不相替手ヲ引テ、筋ヲ立候得ハ、

自然好機會ヲ生シ可申トノ事ニ御座候、尤一橋ヲ落スノ策モ良相

立居模様ニ相見得、内情混雜相究、乍併一橋之權威於幕府甚敷、

役場進退等モ、惣テ一橋ヨリ出候模様ニテ、閣老辺内情不服之訳

モ可有之、不遠何敷面白キ事ニ成立候半ト存申候、扱大坂表御借

金之儀、早速御留守居<sup>江</sup>相達候処、能々致承知、只今之振合ニテ

ハ、決テ相調可申見込之由御座候間、年内中ニハ一統金錢出入甚

混雜之由、正月三ヶ日相立候上申込候ハ、都合可宜トノ事故、

其相通達置候、何卒相談通相運候得ハ仕合ニ御座候、シカシ当分

金廻至極不宜、一統込入候形ニ被相聞申候、來春ニモ相成候得ハ、

決テ繰合モ宜敷成立可申トノ事ニ御座候間、三度計二期限ヲ立、

四五月方迄之間無相違相調候得ハ、可然申含置候、万年丸儀モ爰

許ニテ承候得ハ、南部<sup>江</sup>致滞船余程難船之筋ニ被相聞、シイント

ルノサヲ相損、乍漸南部湊迄乗入、可也修覆相加、加奈川辺<sup>江</sup>參

賦ニ御座候由、石炭モ全ク引切、加奈川ヨリ不相廻候テハ、外ニ

手段モ無之、過分之御入費ニ相及候由、江戸表<sup>江</sup>猪之谷某參、右

修覆料三百兩丈相受取、折角石炭之手当イタシ候ヨシニ御座候、

何分時分不宜、不都合散々込入申候、尚申上度儀ハ山々御座候得

共、未着涯取込居何モ不行届、乍荒増以乱毫得實意候、折角時分柄御厭御保護專要奉折候、時季御尋且カタク御礼為可申上、如此御座候、恐々謹言、

十二月廿六日

桂 右衛門

伊地知壯之丞様

市来六左衛門様

人々

九 慶応二年二月六日

伊地知壯之丞宛

(忠義公史料第四卷)

尚々、時下柄折角御愛護御厭專要奉折候、御帰郷相成候ハ、喜入家<sup>江</sup>イ細御咄被下度、書状ハ遣候賦御座候得共、不能細事候間、可然御鳳声可被下候、末筆御座候得共、ガラバ方<sup>江</sup>ハ貴公ヨリ、尚又御内話相成トノ趣御座候付、決テ御内通相変儀ハ有之間敷、鳥渡形行被仰上候ハ、申替ニ不相成候テ相済可申哉ト相考候付、可然儀御計ヒ之処御報申上候、再尾、任幸便致啓上候、揃兼候気候御座候得共、御国元

御両殿様<sup>久光</sup>益御機嫌能御同慶奉存候、貴所様弥御安寧御精務奉珍重候、於当方小生無異条碌々消光罷在候間、聊御放念可被下候、然ハ建白新聞断判一条之儀ハ、先便粗申上越候得共、何分ニモ案内之次第、当方ニテモ打寄及吟味候処、御教諭之通、初ヨリ建白ニ基キ、筋ヲ立致断判、彼等ニモ能々致承諾、最早我々ニモ致安

心、乍此上為念、尚又横濱ニテモ同様之筋ヲ以断判ニ相成、ミニストルニモ能々致納得候由、今更趣意立替申込候テハ、却テ疑惑ヲ生シ可申ハ案中ニテ、殊更我々共ニモ差揃ヒ、御互ニ談置候上申替候テハ、彼等<sup>江</sup>対シドフモ面皮モ無之程ニ御座候、最早御互ニ跡ニ掛念之廉モ無之故、引別レ候時宜ニモ御座候、岩下氏<sup>平方</sup>ニモ横濱ニテ佛之コンシユル代カシヨント申者<sup>江</sup>同断面会、断判モ骨ヲ折テ被致候由、就テハ爰許ニテモ一統致吟味候処、只今形ニ被召置可然儀ト申談、御国元<sup>江</sup>ハ蓑田氏<sup>江</sup>向、此方ヨリモ吟味之次第モ申上越候間、左様御心得被下候テ、尚又宜敷様御尽力之処御願申上候、

拜謁之条ハ全ク強情ニ被踏付、乗入トノ訳ニハ夢更無之、至極懇切ニ相願候賦ニテ、右様 拜謁被仰付、兼テ御見居候処モ致承知候ハ、此末永ク御親睦申上度トノ趣意ニ相違無之、イカ様御国許御評議之処ハ、セマリタル様ニ御引受共ニテハ有之間敷哉、若十分之断判不相調候節ハ、以前之復轍<sup>覆</sup>ト申様成時機モ難計候付、此度之処ハ曲テ、早ク此難ヲ凌キ候方、可然ト敷申様之御吟味共ニテハ無之哉、実ニ驚歎イタシ候、爰許之情実モ能ク御聞取被下候得ハ、右等之処モ御安心可相成、大久保丈罷下リ申上賦ニ御座候、多分御安心被成下候半ト奉存候、此節柴田東五郎ヲ以、小笠原閣老候<sup>江</sup>建白新聞之一条難シ掛、何様之訳ヲ以、外夷<sup>江</sup>御申込相成候哉、甚不服之次第、条理ヲ立逼リ候処、全ク御存無之候間、早速取調方可致候間、左様相心得トノ事候得共、右様当座之間ニ合候御返答ニテハ難相済、屹ト御糺被下度申込ニ相成居候、若其尽ニ被差置候ハ、夷人<sup>江</sup>ハ此方ヨリ存分断判モ何仕、就テハ幕

府之御失体委クケ条ヲ立可申入儀ト相答候処、至極迷惑被致、決  
テ藩<sup>江</sup>難題相掛様之場ニハ至ラセス、彼之方ヨリ取計モ可有之ナ  
ドノ返答モ有之タル由、然処前文之仏人カシヨント組合、奸計ヲ  
施候幕之奸吏外国掛トカ国元但馬守ト申者ヲ初、数人相打落退職  
相成候由、カシヨシニモ頓ト便ヲ失シ、致方ナキ折カラ、薩ヨリ  
面会イタシ候処大ニ喜ヒ、何篇世話可致トノ賦ニ御座候由、外夷  
各国共甚疑居候得共、当分薩之処一統信シ候様ニ相成タルナト申  
出候由、扱御国之嫌疑ハ御案内之通、申迄モ無之事候得共、此度  
大久保越州登坂之折ハ、大ニ沸騰イタル居候得共、委ク設得被致、  
今ハ何モ訳ナク被成候旨、越前之中根雪江<sup>江</sup>被咄候由、右ヨリ小  
松家被承候、先少々ハ難モ凌付候心持ニ御座候、江戸辺ニテモ懸  
説モ相止候哉ニ御座候、我々共ニモ夷人一条之儀ニ付、早目ニ引  
取候様致承知候得共、長防御所置振之事モ、少々ニテモ色地相分、  
聞届罷帰ル賦ニテ、只今迄無故モ永滞留大屈イタシ候、夫故是迄  
之事実モ申上候為、大久保丈婦郷ニ相成候付、崎陽<sup>江</sup>モ立寄之賦  
ニ談置候間、得ト御面談モ為有之筈ニ御座候、長防御所置之儀ハ  
大膽隠居蟄居・長門永蟄居、家督ハ末家之内ヨリ被調可申付、父  
子之儀ハ伏罪以来謹慎相違ナク罷在候間、朝敵之罪名丈ハ被相除、  
右通被仰付十宅万石御取上ニ決議及 奉聞、被 聞召置候由ニテ、  
閣老小笠原候藝州<sup>江</sup>罷下リ、御裁許申渡トノ事ニ御座候、尤去ル  
四日蒸艦ヨリ出發、右通ニテ承伏イタシ候得ハ、何之如才モ無之  
候得共、中々以当分長防之勢ヒニテハ、決心之人氣ト相聞候間、  
如何成立可申哉、監察永井主水正ニハ、飽迄情実モ被汲取候上ノ  
事ニテ、小笠原候ト同船ニテ平常ノ姿ニ被差越候由、若哉承伏不

致節ハ、御征伐可被遊ナト書付、触流シナトニモ相成候得共、少  
シモ戦之氣サシ見受不申、一度戦ヒ出シ候ハ、モフハ致様モ無  
之モノト相考申候、乍大略形勢御賢計可被下候、此度遠行至願ノ  
内、黒田了助ヨリ佛<sup>江</sup>御賦付之由候得共、願クハ米<sup>江</sup>御遣シ之処  
奉願トノ事候間、夫ハ兎モ角モト返答ハ致置候得共、初佛<sup>江</sup>賦付  
相成候訳ハ、事実カタク 探索モ人柄ニテ、籠居候哉ニ御座候間、  
其許ニモ尚又御吟味被下度、吉原彌二郎ニモ同断之願、是モ同断  
之事ニ御座候、木藤市助ニハ不凶モ横濱在留之教師頭取米人ブラ  
ウント申者<sup>江</sup>鳥渡取会、イロく 相咄掛候処、軍艦ヨリ米之方<sup>江</sup>  
世話イタシ可呉談合ニ及ヒ、師弟之盟約迄モイタシ候由ニ御座候、  
尤ブラウンノ信友ニハンモンドト申者之方<sup>江</sup>申遣候間、右<sup>江</sup>相付  
入塾致修行候ハ、十分可相調申聞候由、甚々籠忽之至御座候得  
共、相約置候付、可卒右之方<sup>江</sup>御遣シ被下度願出候間、当方ニテ  
申談候処、余程幸之事候間、右通仰付可然存候、爰許ニテハ難取  
究、尤貴所御周旋ニテ道モ相付候間、貴公<sup>江</sup>御頼申越候間、御同  
意候ハ、宜敷御取計被下度、右様深切ニ引受候ハ、尚更都合モ  
宜敷候半ト存候、木藤之処ハ拙者ヨリモ御頼申上候間、幾重ニモ  
宜敷御取成被下度御頼申上候、左候得ハ、木藤ヲ除キ而人之場ニ  
相成候間、右之跡指ト申所ニテ吉原参度、吉原跡佛之方<sup>江</sup>野村市  
助御遣シ被下度、順々願出候、是以前文同様、此方ニテハ不相濟  
貴様迄申越置候間、当人共ヨリモ申出候様申付置候付、得ト御聞  
届、可然御勘考之程御頼申上候、最早御帰郷之賦トハ存候得共、  
御在崎之賦ニテ相認候間、左様御納得可被下候、先ハ乍序時季御  
尋カタく可申上、如此御座候、恐々頓首、

二月六日

桂 右衛門

伊地知壯之丞様

人々御中

一〇 慶応二年二月六日

蓑田傳兵衛宛

(忠義公史料第四卷)

猶々、喜人家<sup>江</sup>其外イ細不申越候間、御序を以可然御演舌之義御頼申上候、御同席中<sup>江</sup>も此度ハ何も不申遣候付、是又宜敷御伝声御頼申上候、当遠行両氏より相達候書状三通相添申候、

依幸便一札致啓上候、不順之氣候御座候処、先以

御而殿様其外様益御機嫌好被遊御座、奉恐悅候、貴所様弥以御安寧御健務、奉珍重候、小生ニも無異条、碌々消光罷在候間、乍憚御放念可被下候、当方先万事至極之無事ニ御座候得共、長防御所置之一条、決議言上ニ及ひ、既ニ小笠原閣老藝州<sup>江</sup>罷下り、裁許申渡相成候様子ニ御座候、右言上之次第等ハ西郷方より巨細申上賦ニ談置候間、左様御心得可被下候、長防人心如何候半、別て難渋之訳と相考へ申候、とても幕府戦争之はまりとハ更ニ不相見得、幕府ニて極寛大之御所置と見込候様子歟、畢竟尾老候御建議之跡をふまへ候筋かと申事ニ御座候、よもや只念ニてハ、千万承諾之処無覺束、若哉其通不参候てハ、実ニ大变ニ御座候、一度戦ひを初候てハ、此末いかんとする事不能ニ立至り可申、慨歎至極ニ御座候、扱御国嫌疑之一条は、幕中大ニ沸騰いたし居候由、乍然此

度大久保越州登坂以来、委く説得相成、今ハ何之訳も無之由、右ハ越前之中根雪江より小松氏直咄御承、右之形行ハ御申上越候て可有之候間、致省略候、將亦此度我々共長崎滞留之節、英夷両名<sup>江</sup>致面会候砌、京都建白一条之儀、岩下氏・伊地知申談、再度断判ニ及ひ、最早致氷解、乍然此末尚又

拜謁いたし、兼て御見居之御趣意致承知候得は、当分之ミニストルも、日本<sup>江</sup>ハ、昨今之事故、情実も能く不致貫徹候故、頻ニ拜謁仕度所存山々之由、全く彼より押て、蹈付罷越候趣意ニハ更ニ無之、弥御親睦を相結度との好意中より出候賦ニ相見得居候間、当節柄嫌疑も有之、不容易事ニて、

御許容之程ハ無覺束候得共、

御先代様太平之時さへ、磯<sup>江</sup>被為召候儀も有之候付、往々密盟之訳も有之候間、可相成ハ鳥渡

拜謁被仰付候儀も難計候間、何分形行を以野村罷帰言上仕候ハ、思召も可被為 在哉と申談置候次第ニ御座候処、先御見合之段先度致承知、御尤之御儀と奉存候、然処伊地知方<sup>江</sup>建白一条断判致替候様、就てハ初之断判も無難程能く相済、最早我々共ニハ不案内之廉も有之間敷見居引別れ、幸右下氏ニハ江戸表出府ニ付てハ、横濱ミニストル<sup>江</sup>も直談相成候得は、尚更安心ニも可相成申談置、岩下氏<sup>江</sup>相託し、長崎表断判之趣意ニて建込相及候処、余程ミニストルニも受込宜敷哉ニ、未い細之儀ハ不被申越候得共、此度木藤市助便より大略承候、尤佛之ミニストル代カシヨンと申者<sup>江</sup>も面会相成、是以同断、右之次第ハ自木藤罷帰候上、乍大略御聞取被下度、是迄外々よりも英同様疑ひも為有之由候得共、当分ニて

ハ各国共、却て薩之処ハ一統信し候との咄ニ御座候由、最早右一条付てハ、何も後難ハ有之間敷、此度長崎<sup>江</sup>伊地知方迄被仰付越趣有之、案外ニ存候ニ付、何分不容易事故、致相談度申越候間、先只今通ニて、少しも掛念之廉無之、勿論初より之断判ニて致得意候上ニ、今更ニ相成改て申込候てハ、却て疑惑を生し可申ハ案中ニて、横濱<sup>江</sup>ミニストル<sup>江</sup>も同断之返答ニ相成居候上ニて、かた如何と申談候間、御厚慮を以被仰出候上、御趣意背戻仕候場ニ相当、如何敷奉存候得共、同席中申談、此段奉願度御座候間、能々御汲取、吟味之形行宜敷御披露被下度御頼申上候、就てハ右一条モ有之候付、我々共引取之儀も致承知居候間、指急き申賦ニハ御座候得共、大久保より御聞取被下候半ト奉存候、佛之カシヨ<sup>江</sup>ンと申者ハ奸物ニて、夷人中間さへ不宜、専幕奸吏<sup>江</sup>結込、權威をふるひ候者ニて御座候由、然処近比幕之奸吏国元但馬守と申者初退職ニ相成候折から、当分カシヨ<sup>江</sup>ンも便り少く相成居、薩より致面会候処大ニ嬉しがり、何事も致世話候賦ニ御座候由、右幕吏国元始之者共退職相成候始末之儀ハ、大久保より御聞取相成候半、柴田東五郎を以、小笠原閣老候<sup>江</sup>建白、新聞一条頻ニ難し候処より、国元等も、右之時宜ニ相成候半歟と申事ニ御座候、将又此節遠行人数より之書音長崎より相達、実以 皇国之至難、中々不容易時機ニ相及候半と、苦心之至ニ御座候、得と御熟覽被下度、尤御両殿様<sup>江</sup>も御上<sup>江</sup>被下度儀と奉存候、書面通色地ハ不相分候得共、大策うまく被行候得は、此上なき御国之大幸ニ御座候得共、如何候哉と実ニ待遠く御座候、遠行人数一条之儀、幕<sup>江</sup>申立之趣意尤ニハ候得共、此内より御治定之通、断然先只今形ニ被召置、

可然儀と申談候間、是以左様御汲取可被下候、外夷之情態、横濱辺説之通大体相変儀も無之様ニ相見得、右辺之処木藤心得候分ハ、御聞取可被下候、先ハ年毎籠相之至ニ御座候得共、宜敷御賢覽被下度所仰候、恐々頓首、

二月六日 桂 右衛門

袁田傳兵衛様

人々御中

一一 慶応二年四月二日 伊集院伊膳宛

(忠義公史料第四卷)

伊集院伊膳殿 桂右衛門

其許警衛人数、此節更代被仰付、先日黒田嘉右衛門其外被差立候付、追々到着之儀ト存候、右付肥後直次郎ニハ御用有之罷歸、又々帰旅之筋申談、尚亦其方ヨリモ被申越趣有之候由ニテ、細々事情相達候、乍然モハヤ直次郎ニモ交代之事情間、不被差出候、自然応接旁之儀モ候ハ、初発ヨリ嘉右衛門関係イタシ居候付、同人相弁候様可被申談候、尤此節幕府御目附出張ニ付テハ、直様交代イタシ兼候儀モ可有之哉ニ存候間、其篇之処ハ嘉右衛門等申談、可然様臨機之所置可有之候、此段申越候、以上、

寅 四月二日 桂 右衛門

伊集院伊膳殿

一二 慶応二年四月二十六日 黒田嘉右衛門宛

上包裹

黒田嘉右衛門様 桂 右衛門

無異要詞

上包裹

寅四月廿六日

炭前宰府にて

自鹿府

尚々、湯治行の面々も、最早帰府相成候間、別て気強奉存候、  
暫時ハ同席出勤人数も少く、甚心配いたし候得共、是より少々  
肩も打可申哉と存申候、其許も日数を経候得は、いろ／＼と  
御心配之事も相重り可申哉と想像仕居申候、何卒して、此度  
ハ可也之尾ても取れ候て、早日ニ御帰府之処、折角祈居申候、  
西郷杯の所存にてハ、とても破れ口ハ立申間敷との見当と被  
相聞申候、何分ニも掛て之事故、此筋とハとうも難申御座候、  
再応之玉翰相達、忝令拜見候、時々御返詞も不申、甚失敬之至ニ  
御座候、薄暑之砌ニ候得共、弥御壮実御在務珍重奉存候、於爰許  
雲上御機嫌克、御同慶御安心可被下候、小弟共ニも無異碌々在職  
罷在候間、是亦乍余事御放棄可被下候、当方其後不相替、至て穩  
之形ニ御座候間、御掛念被下間敷候、扱其御許之事情追々御申越、  
実ニ不容易時機ニ罷成、御尽力之次第千万御尤之儀ニ御座候、御  
苦勞之至ニ候得共、折角無油断御尽力、御国威不落様万事御配慮  
所希候、就てハ人数も今少し差出度御座候得共、自然藝州表之破  
談とも相成候ハ、京都<sub>江</sub>も相応の御人数不指出候てハ、不相叶

訳ニも候半と存候付、甚以心外之次第ニハ御座候得共、先見合置  
申度談合いたし置候間、左様御心得可被下候、扱堀直より我々両  
人之間ニても、出張候ハ、可然との趣も再応申候得共、何分一方  
之事ニも無之、是以見合居申候事ニ御座候、貴公御書面之趣ニも、  
誰そ人柄御見合い相成度との段も致承知、御尤ニハ御座候得共、  
何分右等之人柄無多事義ハ、御案内通之事にて、決て西郷辺之処  
と致推考候得共、是も変階ニ望候節ハ、京都の援ニ不相備候てハ  
難相濟、色々心痛之次第ニ御座候、御許之儀ハ、藝州表之模様ニ  
寄、相変し可申哉と存申候、彼表之次第も、成程切迫之形ニハ相  
見得候得共、未幕習之例策敷も不被計、現在其場ニ不至候てハ、  
見留も出来兼可申哉、尤神原之人数さへ進兼候模様ニ候へは、千  
万戦ハ如何候半と存申候、戦と相成候とも、藝州表之儀ニ付てハ、  
枕を高くして宜候得共、其表之一件ハ何とも心痛いたし居候、五  
卿辺之処ハ勿論、有志輩之粗忽無之様、第一之事と存申候間、乍  
不申其辺之処ハ、幾重ニも程能御談合有之度、此上しつかりと条  
理之相立候やう無之得てハ、不相濟訳故、浮浪輩之処も動揺無之  
様、御尽力被成度義と存申候、扱又 京攝御届向之儀ハ、此度よ  
り書面等を以、御届被成候よりハ、堀直太郎其地より罷上り、事  
情色々得と相心得居候ニ付、御家老方<sub>江</sub>申出、大久保・内田等申  
談、御達を以可然筋<sub>江</sub>御届相成候方、可然と申談候間、其段ハ表  
通堀直太郎<sub>江</sub>相達候筋御座候間、左様御含取可被下候、伊集院氏・  
大山其外別段書通ニ不及候間、貴公より宜敷御伝御頼申上候、先  
は貴翰之御礼答、且御尋問可申述、如此御座候、恐々不備、

四月廿六日

一三・慶応三年二月二十一日 小松帯刀宛

(忠義公史料第四卷)

尚々、宮ノ城上京一条、

御書ニテ被仰渡候処、至極御残情甚以込入申候、此度ハ只々

上京トノミ候、御沙汰 是亦込入申候、御察可被下候、

一輪皇上仕候、弥御壮榮御勤奉珍重候、然ハ御軍艦龍行丸廻船ノ儀昨二十日相逢、最早期限モ相廻レ其上未タ成熟不相成、甚以残念千万ニ御座候、就テハ本田ヨリモ申出趣、是迄折角昼夜来月十日迄ニ出来可被成トノ事ニテ、別テ残念不少、此節ノ如キ御用又再モ無之筈ニテ、残多御座候得共致方無之、乍然少々御日延ノ場合モ御座候ハ、一日ニテモ早目出帆為致、一切の仕舞方等ハ折角相仕廻、試乗ニ宜敷候ハ、其儘出帆ノ程ニ申達置候付、決テ油断ハ不仕、返ス／＼出来不被成、残念ノ至ニ御座候、新納氏其外着帆相成、委細致承知、此節ハ十分ニ尽力仕心得ニ御座候、将又鮫島元吉儀、此節小倉一条兄玉小介事件御届方トシテ、小倉引合上京申付候間、御聞取可被下、何モ取込中不能細事、宜敷御汲取可被下候、敬白、

二月二十一日

桂 右衛門

小松帯刀様

一四 慶応三年四月四日 大久保一蔵宛

(大久保利通關係文書二)

御離袖以来未得貴意候処、時分柄暖氣之趣、弥御多祥被成御座、奉珍重候、於爰許

御両殿様其外被為揃、益御機嫌能被遊御座感悦候、然ハ大坂出帆海上至極之平和ニ而諸所都合能、長崎<sup>江</sup>も両日滞留、此内ハ一条も至極之能具合ニ成立、ガラバも横浜<sup>江</sup>出掛近日致帰崎、尤岩下氏<sup>も</sup>於大中寺<sup>ミ</sup>ニストル<sup>江</sup>表通応接、御屋敷<sup>江</sup>も罷下候由、何事も瓦解更<sup>ニ</sup>掛念廉無之、別<sup>而</sup>仕合<sup>ニ</sup>御座候、当月十七日先參との事ニ御座候由、折角相待居申候儀ニ御座候、扱着涯ハ小松家・西郷・吉井も湯治当分ハ至<sup>而</sup>淋敷、然ル処同席いつれも病氣等ニ而、十日計ハ老人つ、出勤なども致す位ニ御座候、甚心配之事ニ御座候、喜入太夫<sup>ハ</sup>着涯四五日出勤ニ而引入<sup>ニ</sup>相成、無間も私領御晦ニ而出勤も無之、看々少人数を見ながら私領之方<sup>江</sup>被差越申候、是ハ見留ハ出来兼申候得共、とても只今形<sup>ニ</sup>而ハ再勤之処如何可有之哉と存申候、夫ハ御案内通安田辺之説不相立、胸<sup>ニ</sup>こたへ候事歎致推計候、安田之策<sup>ニ</sup>半朱琉球札を以引揚札返場<sup>マ</sup>之論有之、いか<sup>ニ</sup>も愚存<sup>ニ</sup>落兼候次第<sup>ニ</sup>而、御勝手方辺<sup>ニ</sup>而も大<sup>ニ</sup>疑問も起候処今、大<sup>ニ</sup>胸<sup>ニ</sup>当り候様子<sup>ニ</sup>被相聞申候、如何<sup>ニ</sup>しても我々見当<sup>ニ</sup>而ハ六ヶ敷儀と相考申候、兎角札と相成候得ハ、十分利害得失能々校計不致候<sup>而</sup>ハ、難相済訊<sup>ニ</sup>御座候処、右は何気なく當時之急を救之策<sup>ニ</sup>而、能く被行候得は無此上事候得共、何分危路居候族不少事候間、とふも難施一策相考申候、大概御推計可被下候、扱我々共着同日新納氏五代<sup>ニ</sup>も帰県<sup>ママ</sup>早速取会彼地情実も承候、最

早西洋之事も随分あかるく相成申候、幕之仏□取込居候一条中々相違之訳ニ御座候、最早御国分十分取込候位の場合ニ罷成候間、外夷之難ハ先凌ぎ立可申義と存申候、然処新納氏など大策と申ハ仏国之大身大三人望も有之者ニ而、官名コントデ名モンブラン四家大身と申様成候ニ御座候間と申者之懇知ニ依而、和蘭ノ新国北義国ベルギリハ商会之組立致約条、たとへハ我国ニ機械を作候得は、右之商会人数中分致出銀何品ニ而も致注文候得は、商会中分致世話遣候様の取組ニ相成、最早決定相付居候得共、弥取起候節ニ及候節ニ及候得は、此御方より使節ヲ被遣候而印を突候迄ニ相成居候由、不容易大策実ニ今之時ニ当り天之賜とも可申哉と相考へ申候、仏江も博物会を仕立申賦ニ而薩も品物出くれ候との事ニ而、是も大ニ利益も有之賦之由ニ御座候、博物会ハ各国共十年目之度つ、是綿致すもの、由ニ御座候、外ニ木綿糸引井百はた織之木綿機械持帰られ候賦ニ而追々相届可申、一日ニ百はたから千五百反織と申事ニ御座候、夫ニ付而ハ未評決も不致候得共、指南人も参賦ニ御座候間、山川江取立三嶋之砂糖四分一位も当所江卸し而木綿之入候様手を付候ハ、山川湊も追々開立往々之為ニモ可宜哉内存ニ御座候、右外国取組一条ニ付而ハ大義ニおゐるとふも可取との議論も御座候得共、我々の所存ニ而ハ只今ニ而 朝命も不奉、私ニ外夷江約候場ニハ御座候得共、行末皇国之御為を第一ニして聊も私せる為ニ無之候得は、少しも恥所ハ無之と存候得共、指当りの義を以遠大之大義を全するこそ當時の権道ニも可有之哉、目前之義之一字ニなつミ候得は手を延はし候事ハ更也、遂ニ大事之難ハ差見得、実ニ不可失之策と相考へ我々ニハ十分決着いたし居申候、此段ハ尚委敷申上度御

座候得共、筆紙ニ尽し兼大略迄申上候、追々と申上残候末筆と成候得共、滞京中ハ御懇志不淺右御礼も申上候、先ハ時季御厭御精勵奉祈候、恐々不具、

四月四日

桂 右衛門

大久保一藏様

尚々汾陽并ニ其外何方江も無音可然御取合御願申上候、

一五 慶応四年一月十八日 西郷吉之助宛

(西郷隆盛全集)

去月廿八日付の玉翰相達し、拜誦いたし候、嚴寒の節、太守様益御機嫌能く御座遊ばされ、恐悦奉り候、扱、此の節御国事御尽力の御廉々、御廟算通り一々相運ぶに付き、一時の御功業殊更遂に兵端相開き、四方八方悉く御勝利、官軍日に月に盛ん成る勢い、御左右毎に御吉報のみ相達し、御家の御兵勢勇々敷、朝威相振るい、実に 王室復古の御大業相立ち、実に目覚敷形勢と相成り、飛び立つ計りに御座候、中将公御感悦弥御順快御機嫌能く、御同慶此の事に御座候、然らば先便はいろく相雜り、当方事情余計の事共申し上げ越し、却つて煩わし奉る儀に、一々御弁解痛み入る次第に御座候、扱、因循の先生迄も此の度は一番に振るい立ち、実に勢いと申すものは奇妙成るものに御座候、兵家の習い、若しや敗を取り候わば、義・不義は論せず、甚だ心痛致すべき処、此の節の如く御留守番は先ず可也相勤め申すべし、然しながら、小松家暫時滞留にて少々肩みも出来候得共、甚だ以て申し兼ね候得



共、何もうせ付けられ、迷惑御推し計り下さるべく候、先ずは此の旨勝軍の御祝詞申し上ぐべき為め、斯の如くに御座候、恐々敬白、

正月十八日

桂右衛門

西郷吉之助様

参入々御中

二白、大久保氏へは態々書音に及ばず候に付き、宜敷御伝え下されたく願ひ上げ奉り候、小松家にも快氣、此の度び上京の時機相成る仕合に御座候、此の度び拙者登京の賦りにて御座候得共、其の機会を得ず残情の至りに御座候、此の末御難渋の御場合はともこれなき事に候得共、止むを得ざる事向にも成り立ち候わば、直様駆け登る筈に御座候、申す迄もこれなき事に候得共、悪しからず御汲み取り下さるべく候、御地静謐に向い候得ば、決して邪魔物、御免を蒙り候賦りに相心得居り申し候、御笑察下さるべく候、

(別紙)

追啓、小松家にも此の度びは至極振りはまり、決して御掛念の廉御座なく候、何卒申す迄はこれなく、余計の申し事因循相究め、御笑い草と成らるべく恥じ入り候得共、何も旧事は御担当、深く御談じ下されたく御願ひ申し上げ候、偕奈良原にも悔悟の訳も御座候に付き、是は以前に変わつて、何卒御会釈の御儀と存し申し候、必ず断然公平の談は俗人の聞く処、公平成らざる様心得違ひ候は常の事にて、重複ながら宜敷御汲み取り下されたく御願ひ申し上げ候、以上、

一六 明治元年十一月二十三日 伊地知壯之丞宛

太守様へホードインヨリ進上物之油紙二ツ髓ニ相達、則懸披露候処、宜挨拶申入候様

御沙汰被為在昨日其通相合、且亦拙者へモ贈物有之候ニ付、是以御方ヨリ宜一札旁宜様御伝給度、左候而其地御用透次第、御方は早目ニ上京有之度、幸玄蕃頭殿ニモ着坂之事候間、旁御相談イタシ候而宜取計有之度、此段申越候、以上、

十一月廿三日

桂 右衛門

伊地知壯之丞宛

一七 明治二年四月六日 大久保一蔵宛

(大久保利通関係文書二)

一翰呈上仕候、不順之候御座候得共先以御多祥御奉職奉欣悦候御両殿様益御機嫌能御同意奉存候、小弟無異条厚く在職罷在、西郷子之外一統每務是亦御放意可被下候、偕 御前様御事去ル廿四日八ツ時御産、御女子様御誕生御健ニ御肥立、恐悦御同慶奉存候、然処引次御前様ニハ御血暈御悶絶ニ而、暫時御自覚終ニ無程御脱血症ニ而御逝去被成、実ニ当惑之至遣方なき御次第ニ被為至涕泣仕候、責而御男子様御誕生共被為在ハ、少々愁傷之中之喜ひとも可申に、残念之次第御遙察可被下候、就而ハ直様如何敷御座候得

共、御跡之形行不被為濟申談候趣奉伺、村田新八<sup>江</sup>相合置候付、御聞取可被下候、右<sup>二</sup>付<sup>而</sup>ハ見込之処致相違候ハ、尚御談合可被下候、キ兄<sup>二</sup>ハ決<sup>而</sup>東京御滞在候半歟と奉存候付、西京<sup>二</sup>而<sup>三</sup>精力之筈<sup>二</sup>存申候、当方も其後別<sup>而</sup>穩<sup>二</sup>而<sup>三</sup>、追々治定被振向仕合<sup>二</sup>御座候、儲御上一条之儀初<sup>レ</sup>御談申上候通<sup>二</sup>御座候処、先便被仰越岩倉御差函之通<sup>二</sup>、御運ひ相成賦<sup>二</sup>御座候折から、此節之御不仕合御到来<sup>二</sup>付<sup>而</sup>ハ、尚更右之御廉も被相加可然哉と申談候間、村田<sup>レ</sup>御聞取、尚又都合能御取計被下度、其外万端申談之趣も巨細御聞達可被下候、何も相略申候、此度御逝去<sup>二</sup>付

皇国固有之神葬式<sup>二</sup>御修業有之、実<sup>二</sup>御英断御同意奉存候、然処夫々御格式も相備候得は、神葬之式ハ感<sup>二</sup>堪候もの<sup>二</sup>御座候、万々歳不朽之御基定可相成ものと奉存候、末毫恐入候得共、此節御変革<sup>二</sup>ハ実以御骨折奉掛、以御蔭国家之基礎相立最早磐石と相成朝廷之寶是<sup>二</sup>過ぐるものハ有之間敷哉と奉存候、私共<sup>二</sup>も少々心ゆるき立最早御暇かすと奉願候、何卒御憐愍御召加被下候様兼<sup>而</sup>奉願候通、御尽力之処偏<sup>二</sup>奉願候、先ハ乍荒々右形行申上度、且かた<sup>レ</sup>之御礼相混如斯御座候、恐々敬白、

四月六日

桂右衛門

大久保一蔵様

参人々御中

一八 年不詳二月末休日

西郷吉之助宛

(大久保利通関係文書二)

毎々鬱陶敷天氣合御座候処、猶御安寧奉珍喜候、然ハ両士上京相成候付、今日ハゆる<sup>レ</sup>取合度御座候付、小松家<sup>二</sup>も当分出勤も無之候間、彼之方<sup>江</sup>掛合候処何も故障無之由承候間、如仰談御出被成間敷哉、甚自由之儀御坐候得共、大久保などへハ貴公<sup>レ</sup>御通し被下様御願申上げ候、尤早目<sup>レ</sup>参度段も申置候間、左様御指合被下度、此旨乍大略書中得貴意候、頓首、

二月末休日

西郷吉之助様

桂右衛門

一九 年不詳五月四日

西郷吉之助宛

一 京都<sup>レ</sup>中国商人と申もの<sup>二</sup>有之、右商人<sup>レ</sup>京地様子逐一相通申候哉、長州へ巨細<sup>二</sup>相知<sup>レ</sup>申候由、尤藩姿を替京地に入込候分は右商人とも<sup>江</sup>手を引合いつれへか忍居候ト申風聞<sup>二</sup>御座候、如何程慥<sup>二</sup>是ト見届タルものハ無御座候得共、頻<sup>二</sup>風聞いたし候、尤入口<sup>レ</sup>御固メ所も帯刀人之外御改無之事故、商人躰杯<sup>二</sup>姿を替罷通候儀ハ<sup>二</sup>御座候、

一 嵯峨天竜寺儀ハ表門柱<sup>江</sup>長州旅宿ト書、大キナル板札打付有之、寺内<sup>二</sup>小屋向七八ヶ所其俣<sup>二</sup>相成居申候、昨年菊川大仏小松<sup>二</sup>引移り後は耆人も詰居候もの無御座候、

一 旅宿札之義は干今小屋向相残居、其上方丈は申<sup>二</sup>不及、寺中迄昨年通り<sup>二</sup>而借請<sup>二</sup>相成候故、宿札ハ其俣ト申事<sup>二</sup>御座候、私寺内<sup>江</sup>入込<sup>二</sup>方丈<sup>レ</sup>寺中を相<sup>二</sup>り候へ共、耆人も詰居候様子相

見へ不申候、

一 寺門之もの申候ニは是非近々御登ト申事ニ御座候得共、とう敷止メニ成ルトヨヒガト申事ニ御座候、其段押而相尋申候処、止宿中藩共甚以不行儀ニ而一統迷惑いたすと申事、尤門前茶店も同様之事申居候、

一 近々屋敷前事情有之よしニ而、五六日已前の上嵯峨伝居之コビキ五六人雇入伏見召連候よし、京屋敷敷伏見やしきか其所相分り不申候、

一 七八日前錦小路殿御玄関に土壺人参り案内を乞候故、別頭之もの出合候処、右土小声ニ而長藩之由ニ而国許ニ殿様ニも御無事ニ被為在候付、御安心可被下様申候、尚御殿内御無事ニ御座候哉、  
国許御左右申上度との事ニ御座候由、書面も無之以上而已之由、奉公人の下女ら□下り相咄シ申候事ニ而慥成事ニ御座候、  
下女六条寺門茶屋之娘ニ御座候、

一 川原町屋しき之儀は用心以て固メニ御座候而、天竜寺同様ニは参り兼候付き、いつれ近々慥成儀承可申上候、

右風聞申上候、以上、

五月四日

桂右衛門

二〇 明治三年十月二十二日

大久保一蔵・得能良介宛

一 翰拝呈仕候、冷寒之御座候、御揃御壮健可被成御奉職奉恐喜候、久々打絶御容体も不相伺不埒之至ニ御座候、当春以来病氣ニ

御候而漸く九月方分出勤仕、不埒之至と奉存候、夫故何も不行

届而已御容恕可被下候、然ハ小松氏も不可謂形行ニ而残念之至ニ御座候、未壮年之事故はるく天下之為御用立候仁而、殊更積年之功劳も不少、一入残念之至ニ御座候、然処及一期遺言書を以被願立趣御座候処、大ニ不都合散々之次第相及、殊更議者之論ニ相係、積年之功劳も皆水泡と相成御互ニ笑止千万ニ御座候、就ハ養子右近成者之玄藩之功ニ仍給ひ候御賞典之禄、無功之私世々ニ奉候儀奉恐入候付、返献支度内願之趣申出相成上候処、然レ共帯刀殿生存中病氣ニ付、多分之入費ニ相及御賞典禄十五ヶ年府引寄拝借金有之候処、其返献之場合も不至、甚以心痛之段致承知、いつれ此上は多年之勞を以御下切奉願、我々共今も貴兄方江御願申上越度、尤末家衆心得計歎願申上候儀ニ御座候由、何分ニも能々御聞請御周施奉願度右之次第候、

御両公様江も相達候上之事ニ御座候得は、幾重ニも情実致貫徹候様御願申上候、当方至而静謐何も相変儀無御座両

御丸指宿江入湯之處、近日御帰殿此節ハ別御相応と申事ニ御座候、黒田氏も下向御地之事情もい曲致拝承、彼是と御心配之御事掛而奉推計候、先は右形行御願上越度乍序ニ御座候得共、時季御伺為可申上如斯御座候、恐々敬白、

又十月廿二日

桂四郎

大久保一蔵様

得能良介様

参人々御中

二一 明治三年十一月五日 大久保一藏・得能良介宛

一翰拝啓仕候、寒威相募候御座候処、各様御揃猶御安康可被成御奉職奉珍重候、於当方両

御丸御機嫌能遊御座御目出度奉存候、然は先便ハ小松家一条申上置候得とも、此節未家禰五覚兵衛御用序上京、私も罷越候付尚又御依頼申上度、い細之義ハ当人演述可仕候得共、初より引請致世話候末之儀に候得ハ、此節も分て御願申上越候様承候付、重て御願申上候、御賞典返献いたし度候処、拝借金過分に相及、右被下切不被成下候てハ一円道も相付不申、実ニ此期に至り帯刀殿存生中之勤勞も遂に水泡に相成候てハ、残念之事ニ御座候付、養子右近殿是非以返献被致度との事にて、実に難截止次第に御座候間、両兄必至と御尽力被下候て存意相立候様偏ニ御願申上候、細詳右覚兵衛事情可申述候付御聞取被下、能々御計被下度御願申上候、仍テ余ハ何も相省き勿々如斯御座候、恐々敬白、

十一月五日

桂四郎

大久保一藏様

得能良介様

参人々御中

二二 明治四年八月十七日

西郷吉之助宛

(大久保利通關係文書二)

尚々当県役人ハ悉ク御引揚相成、当分ハ四人相残居候得共、橋口殿ハ病氣大迫ニハ少々訳有て暫時差扣、是ハ近日中ニハ出動可相成候得共、大山と兩人ニ相勤居乍每留守番難儀ハ引請、難有奉存候、以上、

仍幸便一翰呈上仕候、未秋暑難去御座候処、弥御安清被成御奉職奉珍重候、於爰許愚生ニも乍漸致消光居候間、御放意可被下候、然ハ此節伊地知殿出京之趣意ハ、当人ハ巨細御聞取可被下候、先便申上置候通、此節ハ殊之外御安堵之御模様と奉伺居候処、何の様其後邪氣侵入候半、俄ニ御氣色相変左右医師女中辺五散々之事共致出来、我々共罷出候儀も御差止ニ相成、当惑之至ニ御座候、其後趣意と申ハ、当藩出頭之面々も不少廢藩之議論相起候ハ、藩ニ対し其論ハ藩ニ關係之詔を以迺ニ可然、さすれハ廢藩之場二ハ決而不至、又参事共ニも只うかとして少も憂る形ニも無之、随分尽し様も可有之坏、散々之御模様ニ而、所謂人面獸心国を売るものと思召可有之哉、伊地知は出府之儀も悖て出る様ニ而ハ不相濟詔と、先時機見合都合も可有之と差扣置候処、右通之仕合ニ而不得止上京ニ相決し申候間、万端被仰談被下度奉願候、当分之様子ニ而ハ格別動揺之形とも不相見得候得共、九月中知事公御進退ニ依而ハ、決而動立可申ハ案中ニ御察申候得共、只今之処ハ兵隊辺ニ而免も角維持いたし居候形ニ御座候、旁御推計可被下候、一此度御変革ニ付而ハ、御所置ニ仍而人心之方向も相立事歟と被存候、鹿児島を初外城ニ至ル迄、皆兵を以今日人心之方向ヲ相定メ維持いたし居候事ニ而、兵賦ハ兵の余ると申て解隊共相成候は、とても致方ハ有之間敷、尤御当地ハ学校ニ而子供輩ハ漸々

競ひ立、是<sup>ニ</sup>而結ひ付居候事<sup>ニ</sup>而、此式ツヲ丸て被解て、是迄の梟と被成候振合<sup>ニ</sup>共御召候ハ、凡て瓦解<sup>ニ</sup>相成、随<sup>而</sup>人氣も紛乱、且氣立も更<sup>ニ</sup>無之様罷成可申哉と存申候間、何卒能々御評議被下度奉願候、益兵隊辺之処ハ御繰立之勢<sup>ニ</sup>無之候<sup>而</sup>ハ、兵隊之人氣ヲ相損し候<sup>而</sup>ハ、致様ハ無之賦<sup>ニ</sup>相考居申候、太政之役人ハ必僻土之事ハ余所<sup>ニ</sup>相成と歎、当分之人情とやら伊地知殿<sup>江</sup>もしかと及談合居候間、能く々々御聞取可被下候、其外何もいち、氏<sup>ハ</sup>情実ハ御聞取能々御頼申上候、

一只今<sup>ハ</sup>奉願置候、甚末練之者と思召も可有之哉<sup>ニ</sup>被存候得共、御案内之通之情実、能々御汲取置可被下候<sup>而</sup>ハ、不相叶儀と奉存候間、奉願置候、愚生儀ハ全体身弱<sup>ニ</sup>而、今日之事さへ甚難渋いたし居候得共、昨年既<sup>ニ</sup>国ヲ被取候危難<sup>ニ</sup>趣候付、一先尽力可致との御沙汰致承知、乍不及御引出<sup>ニ</sup>仍<sup>而</sup>罷出居候処、最早国も被取、依然としてハ不被居情合<sup>ニ</sup>罷成、尤御案内通朝官辺之事ハ、とても不堪ハ基<sup>ハ</sup>君公<sup>ニ</sup>もちかひ置候末<sup>ニ</sup>御座候得は、此一事ハ申迄も無之候得共、能々御含居可被下候、尤当職迄ハ押<sup>而</sup>相勤居候得共、大參事と歎申辺も御請出来兼、其下之卑官共ハ、未年輩もはる<sup>ハ</sup>の事御座候得は、県なりとも、君公<sup>ニ</sup>成共、随分相尽し度所存<sup>ニ</sup>御座候、尤、君公<sup>ハ</sup>致承知候事件も有之、退<sup>而</sup>遁世相当之身と相決し居候私<sup>ニ</sup>御座候へハ、此儀ハ生涯不忘一事<sup>ニ</sup>而、心中御察可被下候、尤此節之如く、宮中之次第尚更御意恨<sup>ニ</sup>思召候ハ、第一我々共<sup>ニ</sup>限り候半歎と存候へハ、一入恐入能在候間、能々情実御汲得被下候<sup>而</sup>、何卒心志安んしの様<sup>ニ</sup>奉願候、尚申上度儀ハ山々御座候得共、俄<sup>ニ</sup>出

艦之模様承知片相認不能細事、先ハ時季御伺可申上如斯御座候、恐々敬白、

八月十七日

桂四郎

西郷吉之助様

閣下拝呈

一三三 明治四年十月二十一日

五代友厚宛

尚々、時下御厭、御加保專要奉祈候、またしかと為致儀<sup>ニ</sup>ハ不承候得とも、神戸辺知事とか御奉命忤申風評、内承いたし候、如何の御都合<sup>ニ</sup>御座候や、必、御尽力有度奉存候、久々御沈靜<sup>ニ</sup>て、却て厭はしく思召かも不被計候得共、兎角、国運危難の節<sup>ニ</sup>望、御猶予有之間敷と奉存候、当時の模様<sup>ニ</sup>ては、長々御沈謫の故、却て御徳名も相立候半か、夫者の者共よりも、大<sup>ニ</sup>渴望の説も承得申候、就てハ、申迄も無之候得共、万端衆和ヲ被得候様、御心得方專要と、甚過当の申様<sup>ニ</sup>御座候得共、禿毫<sup>ニ</sup>まかせ申上候間、不悪様御汲取奉願候、再拜、

久々不得芳意打捨、御不沙汰罷過、先以、冷気相慕、御安康被成御座奉珍重候、於当県、僕<sup>ニ</sup>も、仍旧、碌々道光罷在候間、乍憚、御降意可被下、世の消光は、実<sup>ニ</sup>夢地を渡心地トハ乍申、今初て夢見、浅間敷、愚の至<sup>ニ</sup>御座候、文明開化とハ、口<sup>ニ</sup>ハ申もの、今日<sup>ニ</sup>至て、漸く悟道も出来申候、世の人皆愚<sup>ニ</sup>して、天地の在

らん限ハ、皇室と島津家ハ共ニ光ヲ同じくして、万古不拔の国体とのみ不忠ハ無之、然ルニ、此節、廢藩御所置、実ニ恐愕ニ不堪、転倒の御所分、知て愚胆ヲ抜かれ申候、

皇家安危の境ニ臨、是丈の御決策ニハ、人心方向ヲ不乱、一凶ニ歩ヲ相定候訳合ニ相成、驚きながらも感服仕候、就てハ、御案内通ニ、当県人情も同ジ、甚心痛も不少、大ニ相苦ニ罷在候得共、一步も不運、慢々として今日迄相尽候処、世の勢ひ文明ニ趣き、自然の道理ニ庄せられ、老成人の鬱胸ハ、御案内通無論候得共、壯士ハ却て歩ヲ不誤、時勢ニ相反する輩といへども、此決策ニハ一言の物議も相生不申、実ニ天幸と存申候、乍併、此様成変ニハ、必、留守番の心配のみ被掛迷惑、御推計可被下候、猶又国産等取調書一条ニ付、夫々御差図等ニ領り、此度廢藩ニ付てハ、商属の文字大ニ益を得感心仕候、厚奉謝候、扱、分折一条の儀も、御尽力ニ預、御手数被下、別て仕合ニ御座候、是亦奉謝意候、此上も、仁篤宜敷奉頼上候、市来氏より、い細致承知候、市来氏下向の節は、御懇篤の御伝言致承知、痛入次第御座候、乍毎、御深志不淺肝銘仕候、拙子ニも、近来ハ御案内の通、俸給も至て相少く、先ヅ申せば、可也ノ活計ニて罷在、取縮候得は、随分世間并ニハ十分の活計も相立可申候得ば、全体不相当ニいたし居、今更ニハ甚込入、存分取縮ル訳ニも不至、心配ニハ御座候得共、致方も無之、先、当分ニてハ、可也ニ罷在候間、左様御心得可被下候、若哉、無扨筋も致出来候節ハ、決て御遠慮不申上、御懇篤の御志奉謝候、不悪様、御汲取可被下候、市来氏ニも、殊の外、順快ニ趣、下向後無間も、桜島温泉行ニ御座候処、余程快き方ニ相成、漸々快氣ニハ

相違在之間敷存申候、病氣ニ付ても、一同御世話ニ預り候旨、兼て承居申候、此節廢藩ニ付てハ、段々商法等の儀供、工夫ニ相涉候得共、是ぞと申趣向も相立不申、官商ハ惣て相解き、商社様のもの設立候ハ、可然と、内(虫喰)中ニ御座候、然ルニ、山ヶ野金山は、先、日本中ニても是丈の山ハ相少く、仏のコハニも、余程望みを掛候山ニて、生野銀山趣法取立候ハ、必、是ニハ彼の手を以、御取上ニハ相違無之と存申候、就てハ、唐津石炭山御下金、凡十万両と見込、夫を以、立込候内含ニて、川村兵部へ願上、有川矢九郎差遣候処、式万五千両ニて、打切ニ為相成やニ御座候、とても此位ニてハ取立六ヶ敷、機械代一切五万両と見込、式万五千両ハ、大体立付ニハ、決て入可申、左候得ば、外ニ五万両位ハ無之てハ不相濟勘定ニ御座候得ば、現在国民相持之利ヲ見ながら、残念千万ニ御座候、御推計可被下候、山ヶ野・芹ヶ野両山ハ、コハ二見込相付居候間、自然、干今、滞留共ニ御座候ハ、キ兄御一分の御存意を以、機械代・立付等一切の雜費、且算立有之処、両山共ニ御内評被下度、此方役筋より聞繕と申上候は、彼も先年来大望の相談等も承居候末ニ御座候間、宜敷御勘考を以、キ兄自分ニ思ひ立候訳ニて、御質問被下度、御願上候、尤、山ヶ野第一、芹ヶ野第二、被相立候得ば、当県ニて立候ても、壹ヶ所外ハ出来申間敷、左候得ば、壹ヶ所ハ、必、県内の力ニてハ、必、廢山ニ相違有之間敷存申候間、有力者ニ托するの策ニ出可申と存候間、しつかり御質問御願上候、御面働の至ニ御座候得共、宜敷御願上候、自身ニても、立度様ニ申位ニ御座候得ば、利益ハ相違無之と存候間、其辺の御氣も、能く御勘取可被下候、先は時下御尋旁可申上、荒々

如斯御座候、恐々敬白、

十月廿一認

桂四郎

五代才助様

閣下

二四 明治五年四月三十日

五代友厚宛

(五代友厚伝記資料第一卷)

五代才助様

閣下要詞

桂四郎

只今、末家宗右衛門參、貴兄へ御相談可申上呉、との一条御座候、此内より洋行至願の処、干今、不相運、連々不都合にて行違ひ致出来、低意相遂不申、甚慨歎ニ消光いたし居候事ニ成立、然ル処、親王家隨行の者欠跡在之云々の、先生達迄ニは、能く撤低いたし候得共、正然にて発言の人無之ては、運びの道無之、板垣先生ニハ洋行嫌ひの由にて、容易ニ難動、西郷ニハ同県の人にて、発言出来兼、誰れぞ、一言相発し候へバ、随分、西郷辺にて、助言も出来可申、との申合ニ成立候付、大隈先生より、一口の談合ニ及候得ば、直ニ可相決との儀ニ御座候、尤、此節、使節發行の間ニ逢ひ候様□□□□儀にて、頻と歎声難差置、事情不得止、乍御手数、此段も重々如何と被存候得共、公私相混難事、御頼難申上御座候得共、何卒、世上の役と思召、御周旋役御頼申上度御座候間、宜敷奉願度、書中を以、奉得貴意候、尚、い細ハ、当人よりも、事実御聞取可被下候、以上、

四月廿日

二五 明治六年三月三十日

五代友厚宛

(五代友厚伝記資料第一卷)

尚々、先度、蓑原大根の儀致承知、吟味為致候処、漬物にて差上候方、可然との御座候付、漬桶為致候賦御座候間、出来次第、便船を以、差上候間、左様御心得可被下候、

去廿二日の華翰相達、忙手再拜仕候、寒暖往来、別て不順の候ニ御座候処、弥以、御健康被成御座、奉珍重候、頑生依然罷在候間、御降意可被下候、扱、不相変被懸御懇情、当分閑暇徒然、御量察可被下、出坂可相遂御厚意の趣轍低仕、則、拜趨、御沙汰の通、御堂立の弘成社、且御建付の次第等、逐一拝視仕度、山々御座候へ共、御聞及被下候通、豊岡任辭職相届仕置候得共、未、御免許無之、甚迷惑仕居候、不遠内ニハ相運、安心可仕と存候間、当分自俣勝手ニ致候ては、此節の相転、不平よりして辞するとの評ヲ受候ては、残情の至御座候付、此涯、進退相決候迄は、謹慎罷在候て、不遠内罷出彼是、御高話をも拜承仕度、山々相樂居申候、尤、虚病ニ無之、近比、身体殊の外不具合ニ有之、折角保養仕候、斯く変遷の世ニ生れ、実ニ甲斐ある事御座候付、僥倖の命を保ち、真の開化世ヲ見て、目ヲ塞申度、実ニ千歳の一遇ト、奮躍仕居候、扱、砥山開筈の一条、稍、御同意被下、別て仕合ニ御座候、綾金山の儀は、至て不不利の場所ト相見得居候付、何とか向ヲ替申度、当分工夫中にて、随分考を相付居申候間、左様御聞置可被下候、

貴兄も、大碓山御取発の思召、御座候由、実浦山敷御座候、碓山の儀は、未だ白人にて、能く相分不申候得共、全体、好の道御座候へば、当県金山も、旧藩在職中、見込を付、少々手を付置候処、当分の姿罷成、於私、多幸の至御座候、礦山は、手の下様依り、大損得も相係儀と被存候、然ば、関西の礦山、一手御円メ候成度との御大志付、探索可致御沙汰の趣、い細致承知居候折から、宮崎正權參事大憤發にて、延岡出仕の官員藁谷某、多年礦山ニ致尽力候者へ命じ、延岡礦山ニ手を下度、及吟味候処、川畑新兵衛雷同、延岡・米良辺礦山へ、延岡礦山掛松井某成者召列、及探索、金銅両山は、余程良山の模様ニ付、是非取度候得共、本手金無之、基ハ学校取起の爲ニ御座候処、財本ニ苦シミ、貴兄へ礦山相献じ、趣法相建、学校費用等補ひいたし度、拙夫へも預相談候付、致同意、幸、貴兄の思召も、相叶候半と存候間、此節川畑の爲、松井某へ礦石等持參爲致、川畑ニは、是迄の吹出金・砂金等持參の賦御座候間、得と御見聞の上、御許容相成、私よりも、別て相願候、此延岡の最寄は、金銀銅鉛等ニハ、余程爲富地形と被相聞、殊ニ延岡礦山の砂金は、極上品にて、当県金山の焼金の位ニ有之、能き筋ニ切付候ハ、大なる事も出来可申、尤、過日、延岡へ、五六年跡、雇にて差越候山ヶ野金山正役參り候付、模様、かたく、直問仕候処、珍敷能き金位と感心いたし居候、随分、場所柄も宜敷、且彼辺は人氣も質素にて、手を付候ニハ、能き場所柄と存申候、尤、此金山、格別下も不相付、至て若き山と相考申候、自然、能き場所ニ切付候へば、實ニ頼母敷と相考申候間、必、御取付被下度、就てハ、功者の者撰で御雇

ひ、熟知御させ被成候上、御取付相成候ハ、決て御遺策は有之間敷存候、金山の儀は、金氣十分有之候ハ、当分流行の破烈と水車と適宜相熟し仕立候得ば、利益は相見得居、殊ニ、延岡礦石は、金位宜敷候間、能き場所へ切込さへいたし候得ば、失策ハ無之、模様ニ因り、相応の洋製器械取立候ハ、千万勝利疑無之、当分ニテハ、当県山ヶ野金山ニましたる山は、恐らく、日本ニハ相少くと申事、御座候得共、延岡礦石ハ、五割位も品位宜敷候付、金壺ニ切付候節ハ、大利を得可申と、慷慨仕候、何卒、川畑ヨリ遂ニ御聞届の上、御開發幾重も御願申上候、宮崎兩參事杯、同意候ハ、私よりも願越可畏、類ニ川畑を依頼候間、不悪様御汲取可被下候、就ては、無余儀策も相立、是以、川畑より可申上候付、相略候間、厚く御勘考被下度奉願候、

一、当県形容は、實ニ筆頭ニ尽しがたく候付、川畑より御聞取可被下候、海軍大輔西四辻殿爲勅使御下向、当分滞留、来ル六日御上京、御決着相成申候、就ては、御聞及も御座候半、六七十年の老衰毫、奸慾、詐偽、放逸、遊惰の輩、大憤發御供願、数百人、諸郷々の田舎者迄も煽動して、遂ニ御同行、已、旧藩守衛、如く式百五十人東行の賦ニ御座候由、夫に列、一門門閥無殘誘立、華岡種定・穎娃弥市郎・私迄四人位、殘の勘定御座候、諸郷々、一兩人ツ、式百五十人の人数ニ入込、県内不殘不平の姿ニ見せ懸、愚昧御使者、県内是丈の人氣と思させ候仕掛、拙ども奸策恐愕仕候、實ニ公ヲ欺き、上ヲ輕蔑するの仕組、甚慨歎至極ニ御座候、県庁は、金ヲ欺被取、有志の輩は切齒の様子、大山參事は、世話しさに逃登り、何もぼやく、御察可被下候、私ニは多年六ヶ敷時



節<sup>ニ</sup>逢、只、人不知、苦心のみ<sup>ニ</sup>世涉りいたし居候付、此度は局外中立<sup>ニ</sup>て、何も關係不仕、頑愚一生の出来と、御笑察奉希度、尤、此節、拳動<sup>ニ</sup>付ては、様々珍説多く、川畑ヨリ御聞取可被下候、先は、御懇書の厚謝、且御依頼申上度、如是御座候、時下、折角、御保護專要奉祈候、謹言、

第三月卅日認置

(久武)  
桂麩睦拜

(松)  
城陰兄閣下

二六 明治七年三月二十一日 五代友厚宛

(五代友厚伝記資料第一卷)

尚々、不綴の文面、御推読可被下候、

三邦丸帰帆よりの玉章拝誦、天、未だ不順<sup>ニ</sup>て、寒暖往來の候御座候得共、弥以、御壮栄、御福産奉珍重候、頑生、無異、消光罷在候間、乍憚、御降念可被下候、当県、不相替、旧依の処、此内、錢相場引揚相成候処、其令書ヲ不得レバ、一向不被相行、別て、混雜相究、錢一抱、此節相場式倍増<sup>ニ</sup>して、百八貫文と相成候得共、市中取遣、凡、五拾貫文内外、時々相場相變、通融貨<sup>ニ</sup>は不相成、只、質物のやう<sup>ニ</sup>て、当分ハ生産会社・養蚕会社拝借等、上納は、此節、布令通<sup>ニ</sup>て上納相成候間、屋敷目録、質物取返し大混雜、只、両会社ハ錢のみ相屯、借付も出来不申、只、夫形<sup>ニ</sup>屯金と相成候様の由、人情<sup>ニ</sup>不相協、拙策を取候得共、取消候儀も不致、此内、大藏大丞林入俣候節、一錢銅貨御発行<sup>ニ</sup>付ては、小銅錢等、自然、価値相増候半かとの内話も有之候由<sup>ニ</sup>て、松元

良藏を以、小銅貨ト操揚の歎願相立候や<sup>ニ</sup>被候伺、当県計、勝手の事出来可申か、当分形<sup>ニ</sup>ては、中以下の者共ハ勿論、職屋等不通故、甚、困苦相迫、費弊の上、此一挙<sup>ニ</sup>ハ、いづれも職業も相迫、実に歎む敷次第御座候、御遙察可被下候、

一申上越候条々、御答等、逐一拜承仕候、羽島礦山坑道立込の儀は、此内、祁答院承知候通<sup>ニ</sup>て、尚又、福田仁右衛門申談取扱候間、決て御趣意<sup>ニ</sup>相悖候儀無之積<sup>ニ</sup>御座候、礦石も随分宜敷、且盛山の礦石トの儀<sup>ニ</sup>御座候由、多幸の至<sup>ニ</sup>御座候、吟味の通、山ヶ野金山の儀は、全体、金一ト向の礦石<sup>ニ</sup>て、つる筋宜敷、時ハ、莫大の Outcome 相及事候得共、金氣有之礦石ハ、いづれ、相少もの<sup>ニ</sup>御座候得ば、機械も掛候へば、中々沢々の礦石<sup>ニ</sup>無之候得ば、不相濟、当分<sup>ニ</sup>ては、捨石<sup>ニ</sup>て見賦相立居候間、兎も角、算計被相立可申、新規掘立の礦石ハ、中々、機械<sup>ニ</sup>相應候儀無覚束、羽島辺礦石なれば、能きつる筋<sup>ニ</sup>切付候得ば、礦石揚り高ハ、沢山<sup>ニ</sup>相及可申、就ては、御支教の通、鑿立宜敷場所々々ハ、切羽致、吟味立込候様、折角、吟味候事御座候間、御沙汰の通、機械取立ヲ目途<sup>ニ</sup>して、坑道礦石の有高ヲ見込相付、奥深く切込候儀、肝要被存申候、

一生野機械の儀ハ、存違<sup>ニ</sup>御座候、蒸氣機械の考<sup>ニ</sup>御座候処、水車<sup>ニ</sup>御座候由、尤、御見込<sup>ニ</sup>は適當のもの<sup>ニ</sup>無之由、羽島の儀ハ、水車場所式<sup>ニ</sup>所見賦ハいたし候得共、兎角、水氣相少候て、最寄、宜敷場所ハ水相少く、漸く蒸氣用丈の場所御座候、尤、地所至て無多事、機械場所は、巷ヶ所ハ弁利宜敷場所見立置申候間、兎角蒸氣<sup>ニ</sup>て無之候得ば、不相濟と存申候、

一 甌島渡海用金の儀、翁、致承知候、

一 篠原家御送金の儀、い細、致承知候、  
一 羽答院氏、羽島滞留ニ御座候間、引合置候付、返答次第、送込候様可致候、

一 為替金の儀ハ、御払渡ニ候由、一時の御厄害相成候儀と、深く斟酌し、相考居候事ニ御座候、

一 見盤慥ニ相届、落掌仕候、此内、房次郎と申者より申上越候品は、早速、御遣相成候由、余計の儀相成候得共、則、甌島持越用ニも相成仕合ニ御座候、

一 錫山の儀、必至尽力の心得ニハ御座候得共、汾陽ハ、暫時取会、談合も仕候得共、無間、山ヶ野へ差越相成、尤、此節ハ、島津

家御両家様の御支配山と、判断相成候形ニ御座候得ば、少々、向も違ひ候様罷成候間、奈良原ニハ、近来、彼是、御談も相付候やニ御座候間、  
一 羽答院氏へ相托候処、御申越仰候積ニ御座候、

私ニハ、少々手掛り出来候上と存込候処、其後、奈良原ニも面会不相調候間、此節、上京いたし候付、自御上京の賦と存候間、

御打合談合相成度御座候、汾陽ニハ、山ヶ野金山機械取立等、入用金さへ有之候得ば、更ニ相拒ミ候心得無之由御座候間、ど

ふか相談の向ニ仍ては、出来可申か、能々御心得置被下度候、

一 芹ヶ野金山の儀、当分、出金相少、また引合の算計ハ相立居候得共、今一動絶不致候では、盛山ニハ六ヶ敷、然れバ、汾陽よ

り私迄、極内分の咄ニハ、羽島へ手を付候へバ、芹ヶ野両山相円メ候ハ、当分ニても、随分、引合も相立居候間、可然や、

左候ハ、福田仁右衛門へ見分爲致、弥引請出来候、見留有之候ハ、讓渡、一通の内存の旨承候間、則、福田遣シ内見爲致

候賦ニ御座候、自然、見込相付、讓渡ニモ相成候ハ、入金ニ不及、讓請の都合ニも御座候ハ、御引合ハ可仕候得共、其内、極内、御勘考の次第も伺得度、福田の見込も不相分、尤、未然の事ニハ御座候得共、御含御願申上置候、先は一応の御答、且時下相同度、如是御座候、恐々敬白、

甲戌 三月廿一日

桂久武

松陰兄閣下

二七 明治九年九月二十六日

五代友厚宛

(五代友厚伝記資料第一卷)

久敷打絶、不得芳意、当夏炎暑強く、未だ秋暑難去御座候処、弥以、御壯剛珍重奉存候、頑生依然罷在候間、御放意可被下候、然ば、当所相変儀無御座、去ル十二日夜、暴風ニて、近年稀成大風ニ御座候、未だ、しかとは不相分候得共、庁下ハ勿論、田舎々々、倒家多く、死人、怪我人、死牛馬等も、相応ニ有之由、作物等ハ当分の毛上ニては、格別痛も不相分候得共、取揚ニ掛候ハ、式三分通ハ無相違、痛損御座候半と存申候、私ニも、農人と相成、当年ハ相応の毛上ヲ得、相楽居候処、此災ニ相係り、儘ならん世の中、込入候、御笑察可被下候、扱、此間は、家禄制度御変制の御発令相成、皆とも恐愕此事ニ御座候、就ては、自然、次期ニ中至は、案中の儀と、移り行世の形勢ヲ觀察シ、早々、帰農の趣向ニ、以御蔭、昨年片田舎へ致転宅、其形ヲ少々相変候処、親族類中怪ムも不少、然バ、今日の行当ニ、当惑人も多く、頑生の識見通り、如く泰然と罷在候儀も、偏に、御蔭ニ御座候、乍然、禄の

儀は、今程ニハ發表ニハ不至事と存、未だ十分家法改革の場合ニ不至、突然、爰ニ至候てハ、内実ハ、込果居候事ニ御座候、此上ハ、喪家の徒と罷成可申、実、心配罷在候儀ニ御座候、我輩扱置、從來門閥の面々、非常改革と申ても、存分の事ニハ至兼可申、左すれば、遂ニハ、止ヲ得ざるニ立至可申候、実ニ難忍詔合ニ御座候、華士族、軍職ヲ被解、素餐の責ヲ被免候儀ニ御座候得共、一般華士族の情、如何と想像いたし居候、於朝廷ては、脱刀より家祿の更改は、国家の大事件、両ツながら、安々と御所分相成、是よりは、何もかも、難き儀ハ有之間敷、しかし、現見ハ不仕候得共、近来、官員の家宅壯觀、庭上の物好等、おりく相聞得、是以、三千万人の握手より出候稅物ニて、月給も御賜与相成候得は、華士族の祿税も、家宅壯觀、翫弄の足合と申如く、尔来ハ、何卒、右辺の事ニハ、官員衆も注意所希ニ御座候、貴兄如く、自の力ニ依りて、人の耳目ヲ弾くものは、夫丈の財力ありて、怪ニ足らざる処なり、御笑察可被下候、

一此内より不埒仕、何等も不致候処、祁答院氏への御書中、御伝詞の趣、御懇志不淺拝承仕候、其後も、御無沙汰罷在候、尤、安州辺御旅行の段も、相見得候由、其後、彼表御用向御弁達、早御帰坂の事と奉察候、彼地ニ御用向ハ不相分候得共、御察を以、御都合能相運候半と奉存候、

一此内より、現在拝承ハ不仕候得共、何か大業御取興の御模様も、粗、致承知、既ニ其儀も御成効、此節、専売免許同様ニ相成候由、畢竟、水紺製法引続、所謂、インジゴ製法之事ニ御座候半、御仕懸の水紺も、同様御発見相成候や、是ハ、とても六ヶ敷候半、

就ては、製法資本金四拾万円とか、十二年府御下ゲ渡相成やニ相伺、弥、其通の儀ニ候へバ、最早、是よりハ、如何様の儀も、御發達相成事と奉存候、於当所、拙夫共、祁答院氏俱々、御悦仕候、御勉勵御尽力の程奉禱候、

一羽島金山敗走後ハ、何にも残情骨髓に徹シ、一度ハ此鬱ヲ散ジ度、兎角、芹ヶ野金山入手の外、手段無之とハ存候得共、其内手近くハ、錫山ニ過ぐもの無之と、尤、谷山錫山類ニ御懇望の訳も有之候間、之に不相劣場所、見立申度存候折から、垂見へ不凶致出礦、右ハ大体、御聞及ニも相成居候半。其後、段々手を尽し候処、牛根へ所々発見いたし、尤、一ヶ所ハ、草ボコノ燃上り有之、致試験候処、礦ニて、□より錘筋探索ニ取付、当分迄手を付候良脈ヲ探、既ニ能き場所ニ近寄、不遠、否、可相分、此度ハ、極々、丈夫儘成錘筋取付、製金取続相成候テ、初テ錫山着手の積ニ相心得、精々尽力罷在候得共、何分資金乏敷、漸く繰合中での探索ニて、坑夫五六人召仕候間、急埒不仕、思ヒ込の場所も、着々手ニ及兼罷在、畢竟御迷惑掛上、尔来、補の目途相立、如是仕合ニ御座候、決て、良山ニハ相違無之、私ニハ繁々踏込も不仕候得共、祁答院氏最早功者ニて、立込の錘筋等、極々儘ニ見込、此節ハ、尚一層、必死の尽力ニ預り、決て、良脈不遠取付可申と存罷在候、是迄為御知不申上候儀は、甚以、不本意千万ニ御座候得共、精々私力ヲ尽、少々実効相見得候上と、全く、差控へ罷在候儀ニ御座候、既ニ二百斤余製金も仕、製金仕続候様、良脈ニ取付候上、申上越候心得ニて、控置候得共、殊の外、見込延引ニ相及候付、製錫并ニ錫礦三品差上

候間、御吟味被下度、尤、生野方へハ伊東仙太夫より相廻し、  
試験相頼越候、コニ一の説にては錫ハ金銀ニ近きもの、由、類  
ニ申候ヤニ承及居候間、屹と、試験相頼候事ニ御座候、尤、楠  
根ヶ谷と申礦脈ハ、順聖公銀坑御取起の場所にて、少々銀も出  
来候由ニ御座候間、銀氣ハ相応可有之、相楽罷在候、分析上、  
銀氣強く御座候、至て仕合ニ御座候、錫製法以上ハ、銀氣全く  
無之様子ニ御座候、錫製法ハ、石焼強く御座候付、錫よりハ、  
銀ハモロキものにては無之ヤニ存申候、兎角、礦石にて、試験不  
仕候てハ不相分、何分ニも、宜敷御計度、当分御多忙中、是等  
の儀、御手も付兼候儀とハ存候得共、何卒、不悪様奉願候、先  
は、時下御尋申上度、如是御座候、敬白、

丙子 九月廿六日認

桂久武

友厚閣下

二八 明治十年一月二十八日

五代友厚宛

(五代友厚伝記資料第一卷)

尚々、三邦丸先便より、書状差上候処、未だ、御滞京中にて、  
御帰坂無之由ニ致承知候。東京にて、変革相初候由、右ニ付  
てハ、かたいく関係の儀も御座候半と推計仕候、勿論、貴  
兄御製造品、所分等ニ相関し候儀共ハ、無之候やと想像仕候、  
毎度の変革、人心如何と存居候、当県の儀は、先度申上置候  
通、更ニ相変儀無之、至て静謐ニ御座候、御安心可被下候、  
一琉球一件等ハ、い細兒玉へ含置候間、御熟間被下度奉願候、当

人儀も、一向差か、り上、尽力仕度心願にて罷在、県庁雇も相  
断候、付てハ、何卒、当人ニ相応の御用御申付被下度、分て御  
願上置候、再尾、

兄玉登坂ニ付、草翰呈上仕候、寒氣の砌ニ御座候処、弥以、御壯  
剛奉珍重候、然ば、兄玉帰県ニ付、差向の御返答は、三邦丸より  
申上置候通御座候、然ルニ、大高山藍製一条、共後都合見合、大  
山令へ及談合候処、先便申上置候通、熱心執着深候、思込丈ハ、  
懇々、及示談得共、当分通、県にて着手いたし候付、差置呉候様  
ニと、彼よりも相談候ときの返答故、無理難申、其内ニハ勸業寮  
等の名目等ヲ立、曖昧の儀も御座候得共、とても難引落模様被察、  
夫儘、召置周施行届兼候様ニ、御汲取も御座候半と存候得共、強  
て申候ては、却て不宜と存、堪忍仕置候、右等ハ、兄玉より御聞  
取被下度奉願候、就てハ、琉地御着手の方、当分にてハ、十分の  
事と奉存候、尚、彼地の事情は、兄玉より御聞被下度、仍て、同  
人も碌々滞県も心ならず、此節、三邦丸便より、一応上坂、万申  
上度所存にて、登坂ニ相決候間、不悪様御汲取可被下候、当人も  
当県大島藍製法雇被申付候得共、初より貴兄へ相付、尽力致度存  
意にて相断、就てハ、此末、可然御召仕被下度、私よりも、御願  
申上可呉との事ニ御座候、琉地御着手御座候ハ、彼地案内者の儀、  
先便巨細申上置候付、何分の儀、早便より為御知越被下候得ば、  
当人召呼、趣意申合、上坂申付とも、御沙汰次第取計方可仕候、  
一牛根錫礦の儀、一昨年春より、試験掘着手の処、追々、模様ハ  
十分ニ宜敷、遂ニ満一ヶ年の星霜ヲ経、乍漸、其効ヲ奏シ候様  
氣運ニ罷成、目路見の通運ビ候様にて、一先安心仕候、初より、

見込の場所三ヶ所にて、当分ハ二ヶ所坑道明ケ、いづれも模様  
宜敷、先度申上候通、樋筋の金にて、試吹迄も為致候処、相応  
の品位有之、此上ハ、丈夫成立樋筋へ取付候上ハ、製金連続  
の積にて、折角、高低と相待居、実ニ苦心困配の折候、見本石  
の通切付、未だ、立込の程合ハ、実見不仕候得共、此度ハ、相  
違ハ無之、と坑夫共より直ニ持届越候付、其儘、右品入御覽候、  
谷山錫山ニても、無之程の礦石ニ御座候由、山師共大喜び仕候由、  
就ては、一と所丈ハ、上位の礦石取揚、此勢にてハ、金筋連続  
可仕、と相楽居申候、一ヶ所ハ、当分、望所近く罷成、折角相  
存居候付、不遠、望所へ切付可申ハ、案中と存申候、一ヶ所よ  
り、漸時、及ばず積の手組ニ御座候、此ニヶ所ニ取付候得ば、  
容易ニ、製金連続の都合と成可申や、一ヶ年の星霜、中々、礦  
山ハ不容易ものニ御座候、是迄の苦心ハ、御推察被下度、殊更、  
祁答院氏誠心、実ニ感心ニ御座候、耐忍力、御察可被下候、扱、  
御書面御差出被下候趣の処、是迄不相達、諸方探索ニ及候得共、  
不相見得候処、有川矢九郎所へ相滞居候由にて、近日届来、直  
ニ拝誦候処、十二月四日付の御書、慥ニ相受取、錫鉱一条御返  
詞且資本金一件の儀、縷々懇々被仰聞、御懇篤の儀、肝銘仕候、  
是迄、御厄害掛上、乍其上、何とも汗顔の至ニ御座候得共、二ヶ  
年の辛苦、試験掘ニ御座候得共、手薄の身体ニハ、相応の入費ニ  
て、難仕届と心痛罷在候処、此御志封にて、実以、愉快の心胸  
ニ罷成、最早、前件の次第、模様能く相成居候付、一入、鬱胸  
相散見込の所迄も手延、弥、盛山の期ニ近く相成、以御陰、生  
来の楽と罷成、重て御厄害ながら、今、一往、御助力被下度、

是迄、莫太の御失費も掛上居候末にて、鉄面皮ニ御座候得共、  
力ニ不及、止ヲ得ざる儀ニ御座候間、分て、御願仕候、仍て、  
此節、別紙写の通、為換取組差上候間、能きニ御取計被下度、  
当今、家祿制度も変換相成候付ては、家産と可相成業ヲ相聞置  
不申候ては、公債証書と相成、自然、所置振ヲ失し候ハ、即  
分、斃る、外ニ、手段も無之様罷成候間、是非、礦山ニても、  
取起置含の一応をモ相達申度、頻ニ心思ヲ勞レ罷在候儀ニ御座  
候、先は、かた／＼申上度、且御懇篤の御礼、礦石も入御覽度、  
如是御座候、乍末毫、年始の御祝詞、乍序、可申上、恐々頓首、  
丁丑 一月廿八日認置  
桂久武  
友厚兄閣下

二九 明治十年九月四日 田尻英二宛

(田尻家所藏文書)

弥御揃御機嫌能奉恐賀候、何方ニ御同前候半、御同慶奉存候、然  
者私供父子共出兵以来今日ニ至迄ハ、無難罷在、殊更今度ハ日州  
延岡ハ豊後境近処永井村と申所ハ去月十八日夜ハ切抜、千辛萬苦  
山坂艱難、実ニ難堪、当所迄ハ六十余里、日夜通行、一昨日二月  
四時当地ニ致到着、尚又元氣罷在候間、御安心可被下候、当所未  
だ戦争央ニ而何も手ニ付不申、自後ニ罷成候節ハ拜顔仕度、何方様  
ニも御機嫌能候半と奉存候、最寄之御方々様ニハ可然御伝被下度  
奉願候、然共実ニ御氣之毒申上兼候得共、最早致方無之候付、右  
形行却為御安心申置度御座候、猛殿事於庄内少々手負候、一左

右承候付、都之城江滞在故、自出会可仕參見候処、最早当所ハ出

立之旨承、跡より為追、下人三四郎遣候処、追付不申、高岡之様

出發之由ニ付、尚又看病方として三四郎遣、付添看病方為致置、

私共ニも追々宮崎之様引払、終ニ高鍋町ニ行逢、容体等殊之外宜敷、

手負之次第等悉皆承届、初大崎郷麓左之手親ゆひ人指ニ掛手負

之処、格別之痛とも無之候得共、漸々相くされ込、いつれ切断無

之候而者不相叶時宜ニ、幸い足立梅景罷在、右江頼ニ、旁都合能

療養看病等ハ少も遺憾之廉無御座候間、御安心被下度、左候而日々

跡先同道、時々御見舞等仕候処、翌日ニ者格別容体相變、人事も

早不相返、甚掛念ニ存候処、終ニ延岡町ニ八月四日養生不相叶、

残念之至奉存候、兎角軍陣ニ臨ミ死生ハ宛行之事ニ、兵家之習と

存候間、無上ハ致方なき儀と思召被下度候、終ニ我々共当所迄罷

歸り、御同行不致儀者、遺憾之至、御洞察被下度奉頼候、看病方ニ

者家来之安田袈裟次郎、隊中ハ付添、女看病人等ハ別紙之通、延

岡宿亭至而叮嚀ニ預り、一同相当挨拶仕置候、墓石も早速立方仕度、

直ニ石切呼注文、文字等書付渡置候得共、私共滞在中ニ者出来不申、

是丈ハ残多次第ニ御座候、墓參等之儀、宿亭主江相頼還候間、隨

分行届可申、安心仕候、依而大小私預居り置返上仕候、遺髮并ニ

手帳之儀腰付罷在候得共、何分ニも昨今と存候折からニ、病院江

相渡候、金子拾一円二十錢有之候得共、別紙之通、旁ニ召仕ヒ申

候間、左様御心得可被下候、先者右形行申上置度、如斯御座候、

謹言、

明治十年九月四日

桂四郎

田尻英二殿

御家中様

(別紙)

一女看病人肥後国千反畑ツボへ杉ノ三崎内田次作娘すへ

右同骨折金五円

一猛殿延岡宿亭日向延岡六大区満石元次

右至而叮嚀ニ預、殊更墓參等至可呉約条ニ付、金五円遣候、

一猛殿先度通行之節、宿亭主吉崎源藏、此節至而叮嚀之世話ニ預

候付、金二円遣候、

一猛殿延岡宿亭満石元次隣家同吉満平、叮嚀致世話候付、金一円、

一隊夫卒芳野袈裟助、金三円、

一金二円ツ、安田多次郎兄弟江、

右之通御座候、

一刀大小

一金十一円二十錢

一手帖一ツ、

右之外品ハ惣而埋ム、

一延岡南町船倉光勝寺、親宗、門内左側、梅樹ノ本ニ葬ル、

明治十年七月十一日、大隅国於大崎郷手負、同八月四日陣没、日

向国延岡光勝寺境内葬、

三〇 八月二十三日 兵庫軍務官へ上申書

(忠義公史料第五卷)

右之品々、今般急速御用之儀候間、鹿兒島表於テ精々差急製造之上、兵庫軍務官へ可被差出候、尤右代衞ハ、追テ相当ヲ以テ御下ケニ相成候事、

兵庫

アームストロン

十二斤 弾

シナイトル 弾

七月廿二日

軍務官

薩州

役人中

三一 慶応元年三月七日 西郷吉之助宛

(西郷隆盛全集第五卷)

右ハ急速御用ニ付、於弊藩精々差急製造之上可差上旨、被仰越趣承知仕候、アームストロン弾之儀ハ、随分製造相調差上候様可仕事候へ共、於弊藩モ諸所へ出兵被仰付、数多之彈製造史ニテ、此節出兵之用途サへ弁兼候位之事ニテ、甚以困入候次第御座候間、暫御猶予被成下度奉存候、左候テ追々出来次第差上候様可仕候、シナイトル弾之儀ハ、製造不相調候間、左様御聞置可被下候、此段申上越候、以上、

御官名内

辰 八月二十三日

桂右衛門

兵庫

軍務

御役所

〔右之通、<sup>(朱)</sup>辰八月二十三日平運丸上坂便、大坂御留守居へ向ケ、

相届候様申越候事、

本文申来候越、

アームストロン

十二斤 弾

シナイトル 弾

幸便に依り一毫呈上、海上都合能く御光着、猶又御機嫌能く入らせられ、御同慶至賀奉り候、貴公様御壯剛珍重に存じ奉り候、当方 上々様御機嫌克く恐悦奉り候、拙子にも無異消光罷り在り候間、余事ながら御放意下さるべく候、然らば、御立ち後相変わる儀御座なく、別けて淋敷事共に御座候、折角海・陸軍方も振興の心組みに御座候、扱大奥一条の儀、最早大概仕舞いと安心致し、御立ち則日、勝姫様御沙汰の一条召され、残り三人の御返答申し上げたく罷り出で、御都合相伺い候処、二の御丸へ御跡御祝いに御出で相成り、其の日空敷御都合もこれなく候間、翌日 御前様御目通り願ひ奉り候処、今日は御不予にて、五日は御逢い遊ばされ候儀叶わせられざる段承知奉り、押ししても願ひ奉り難き次第故、太守様にも一日も早目に相運ばせ候様、御催促迄も承知致し、期限は既に相迫り候事故、太守様へ伺い奉り候処、時日押し移り候ては相済まず候故、今日

申し渡し方致すべき旨承知仕り候に付き申し渡し置き候処、八ツ後求馬より大急ぎ御用談申し来たり、出殿致し候処、先刻求馬へ御前様よりこれあり罷り出で候処、勝姫様を以て右衛門へ御沙汰の趣もこれあり、吉之助へも申し聞け置き候儀、未だ評議の返答両条共承らざる内に、此の通り申し渡し候儀は何様の訳かと御書付御扣え遊ばされ、甚だ不行き届きの旨御沙汰在らせられ候故、右は御都合伺い奉り候処、五日は御逢いも為されざる段仰せ出され候に付き、太守様へ伺いの上仰せ出され候段申し上げ候処、此の書付は手前へ相返すとの御沙汰故、是は決して私御受け取り申し上ぐ儀は相叶わず、筋々へ御渡し付けこれなく候わでは相濟まず、しかしながら右様御沙汰在らせられ候ものにてはこれなき筈と申し上げ候処、吉之助へは三人の事は遮って申したる事にこれなく、幾尾の処を第一に申したる事故、此の上自分に考え次第致すべく、残りたく存じ候者は残し、帰りたきものは帰り候間、其の通り承知致し候様との御沙汰にて、いろいろ申し上げ候内、幾尾両三度も御前へ出、せきせきいたし、度々叱り付け候次第にて、御前よりは幾度も、御存じ通りに遊ばされ候との御事故、御沙汰振り一円承知は出来申さず、表方の吟味を以て伺い奉り候末の事にて、此の上今一度右衛門召し呼ばれ御沙汰成し下され候わば、然るべき旨申し上げ候処、只今申し遣わたしる由承知致し候に付き、則ち御都合伺い、求馬同伴嶋岡にも召し列れ、御前へ底頭百方言葉尽くし諫諍奉り、第一御前様御徳相損じ、太守様御徳相闕き、宮中にては

るる段は、衆人慕望奉り候訳にて、此の一事御許容これなく候ては、万古無究の御作法召し立てられ候御趣意相立たず、一時に画餅と相成り、且つ又御国人は御用に立たざる様、衆へ御示し遊ばされ候場にも相当たり、下百万人の父母たるの御趣意に相叶わず、尤も御政事御委任の者共より言上仕り候儀を、宮女のために思召し替えられ候訳等、古今の例に涉り肝胆残る所なく申し上げ尽くし、漸くながら御許容と申す場合迄相成り候に付き、嶋岡呼び出し、細申し含め、其の上幾尾迄も呼び出し、此の節御暇成し下され候御趣意、父母兄弟の情義を思召され、此の節目出たく帰郷仰せ出され候旨苦々敷挨拶いたし候、就いては御前様へいろいろ申し上げず一同安堵致し、其の上御腹御居え遊ばされ候様にこそ幾度も申し上げ、御未練成る御行容在らせられざる様、此の上は御前様御ため御徳相損ぜざる様に御心得これありたき旨悉皆申し置き、然る処へ安姫様御出でにて何とか御沙汰これあり、大いに御涕泣背に汗して退く、御推計下さるべく候、是も彼等の策に出で候儀、女婦子の好も油断実相成ならず、是には少々弱まりて退き畢ぬ、其の翌又々玉里へ遮つての御用故今日中是非罷り出で候様承知致し、一寸も引いては事成就せずと決定して、又罷り出で候処、此の度は勝姫様思召し付きと申す処にて、至極柔か成る御沙汰振りにて、築地御屋敷迄御暇の上、幾尾並びに安姫様御付き兩人儀は、思召しに在らせられ宿許召し立てられ下され候て、御当地へ召し置かれ候筋を以て、召し仕われ候様の取り計らいはこれなくやと存外成る儀にて、是以て彼等は策略を廻らし御沙汰と相成り、又徳寿院方かまいの鈴々木善兵衛娘は、草牟田へ召し置



かれ候ては如何候わんかとの御事故、是は徳寿院由緒柄の人故、

三人の列へも相加え候えば、其の辺の処は随分然るべき訳と存じ候得共、最早御沙汰相成り候上は、何様の訳これあり候ても相濟まずと存じ込み居り候上にて、何様御沙汰これあり候ても、最早今に相成り候ては一円相叶い申さず、尤も他人なれば兎も角も、徳寿院方の人なれば猶更の事、外に先き立たれ候こそ當時御統柄に対せられこうばしき訳に候処、一時も御請は仕らざる旨申し上げ切り候処、両三ヶ条の内一時はゆるして呉るるかと存じ候処、夫ならば此の上は決してもふは此の事は申す間敷との御事也、是も前後左右譬えを取って申し上げ候、然らば折から随真院様御越し中故、爰にも迫まりはせまいかと存じ候処、此の御方へは沙汰なしにて、兼て御聞き及びも在らせられ候由にて、思召し分け至って此の辺の事には御宜敷由、聰徳院様なれば一難儀は差し見得居り申し候わん、先ず相片付け既に期限通り出立相成る筈に御座候間、最早頓と安心致し候、先ずは右形行申し上げ置きたく、疾に御着き成られ居り候に付き、序でながら御着きの御祝詞申し上げたく、荒々斯くの如くに御座候、毎々乱毫御推覧願ひ奉り候、恐々敬白、

三月七日認め置く

桂右衛門

西郷吉之助様

人々

追啓、私にも此の節の恩賞には、明日より暫時湯治御暇申し上げ候て、国分へ罷り越し候賦りに御座候間、此の段左様御心得下さるべく候、末筆愚兄にも全くの初旅、前後宜敷御頼み申し上げ候、

三二 明治二年七月六日 西郷吉之助宛

(西郷隆盛全集第五卷)

御離袖以来は鳴音を得ず候処、速やかに御帰国、目出たく存じ奉り候、秋は地蒸すに付き堪え難く候得共、益御壯剛御入湯成らるべく、御相応喜び奉り候、然らば小弟にも御発艦の時分より不快にて引き入り、其以来一向快方に趣かず、ぶら付き候処、湯治相応致すべしと、医師共よりも進め立てられ、遠方心懸け、高城温泉へ差し越し候得共、更に寸験もこれなく、却って腹具合相損じ、散々の体にて罷り帰り、今に自然に罷り在り、当時柄甚だ以て心外の次第に御座候、貴兄にも此節は速やか成る御帰国にて、案内前広は、折角差し急ぎ帰府致し、早く御面会も申し上げたき含みに御座候処、少々宇路付罷り帰り候えば、早湯治御越し候由、行違い相成り、別して残念の至りに御座候、東方始末、概略黒田・有川辺より得斗拜聞致し、途方もなき次第、嘸と推計奉り候、併しながら此の末少しは薬の爲め相成る筈候かと存じ申し候、扱、書中麓暴の至りに御座候得共、御内談申し上げたく、粗忽の処は御宥免下されたく願ひ奉り候、小弟にも前文通りの形行、長々引き入れ、とても只今通りには今明出勤の気は御座なく、甚だ以て恐懼の次第にて、御案内の通り全体身弱く、殊に近來頻りに相弱り、定服薬程の儀にて、是迄は精々当分通り在職罷り在り候得共、何分気力薄れ、入り組みたる儀は勿論、書付け等取り調べ細覽別して難渋いたし、残念の至りに御座候得ば、此の涯閑静を得、随意に保養仕りたき念願に御座候、当節安楽に一身を過し候心得

には千万御座なく候得共、実に込り果て申し候間、仰ぎ願わくは御聞き請け下されたく、其の余心に任せざる儀共、人知れず心痛のみに御座候、御懇察御憐愍願ひ奉り候、尤も御政体も大概御治定相成り、最早少しも掛念の廉更に御座なく、安心いたし候由、存じ候迄御聞き取り申し候得共、政道の儀は川村へ承り申し候得共、随分念遣わし候間敷や、一身の事さえ汗顔至極候処、思召しも如何に存じ候得共、所存迄に御座候間、悪しからず御汲み得下さるべく候、先ずは御着の御祝詞申し上げたく、用向きの方、序ながら行き違わず、随時御保養御入湯專要祈り奉り候、恐々頓首、

七月六日

三三 明治二年十二月二十七日 西郷吉之助宛

(西郷隆盛全集第五卷)

昨晩は拝襟長座、太屈の筈と跡更恐縮仕り候、ゆる／＼御高説を得、多幸の至りに御座候、右謝し奉りたく候、扱、其の折御咄し申し上げ得承り候、別紙の通り、岩下氏より百錢偽造の一条申し越され、尤もの儀には御座候得共、当分専ら見当に相成り居り候事故、今明取り止め次第にて、甚だ心痛いたし候、去れば、公然此の儘打ち過ごし、彈正台より沙汰にも相成り候ては、候罪免れ難きは勿論、御国辱にも成らるべきやと、深重恐懼の訳に御座候、然しながら、旧幕中、先君御届け成られし琉球通宝鑄造の御策、御他界後、安田徹藏を以て幕吏へ解き込み、夫形相済み居り候末の事御座候得ば、万一沙汰に及び候わば、其の辺の処を以て相答

え候様、少々疏通取り交ぜ偽鑄いたし候ては如何御座候わんと、何分捨て置けざる事件故、御直に御談合申し上げ候筈に御座候処、多事に取り紛れ失念致し、大形の至りに御座候、何分御勘考の次第御知らせ下され候得ば、至って仕合せに御座候、此の旨忽々乱毫を以て貴意を得候、以上、

極月廿七日

四郎

吉之助様

貴下

三四 年不詳正月六日 西郷吉之助宛

(西郷隆盛全集第五卷)

一翰啓致し候、年内には御懇篤の貴墨忝く拝見致し候、弥御健剛、珍重奉り候、小子にも無異罷り在り申し候、然らば安田札一条の儀に付き、御懇考之趣逐一に承知致し、爰許にても実に粉々、彼是御推計下さるべく候、就いては御示聞の通り、当時数万の金策等容易ならざる事にて、尤も札一条の趣法は別して感心致し候訳に御座候処、初めよりの約束と少々変遷いたし、其の上種々様々疑念も相生じ、実に其の良策をさし置き候儀には御座なく候得共、人々疑惑も少なからず、当分通りの行がかりにては如何と心痛の余り、爰許にても詮議に及び候処、何分にも危きながら踏み駈けの儀も出来兼ね、爰許にても段々困究の余り、松岡・伊地知上坂の筋に相成り候、適々御尽力の央に、別して気の毒千万に御座候得共、当方の形行も御談合申し上げたく、委細の儀は兩人へ申し

聞かせ置き候間、御聞き取り下さるべく候、所謂因循には御座候  
得共、前後勘考に涉り候処、実に容易ならざる事件故、幾度も衆  
評に相渉り候外これなく、尤も御勝手方より趣方立ての儀もこれ  
あり、至つて手ぬるき事にて迂遠とも申すべく候得共、此の儀は  
大丈夫に趣法も相立てず候わでは、一度故障付き候時は取り返し  
も出来兼ね、急迫の次第御推考下され候て、能々御聞き取り下さ  
るべく候、先ずは此の段貴答荒々斯くの如く御座候、恐々敬白、

正月六日

桂右衛門

西郷吉之助様

人々

# 既刊史料名

- 三十四年 第一集 薩藩政要録
- 三十五年 第二集 丁丑日誌(上)
- 三十六年 " (下)
- 三十七年 第三集 薩摩国新田神社文書
- 三十八年 第四集 一向宗禁制関係史料
- 三十九年 第五集 薩摩国山田文書
- 四十年 第六集 諸家大概・職掌紀原
- 四十一年 第七集 薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記
- 四十二年 第八集 御登道中日帳御下向・列朝制度
- 四十三年 第九集 明治元年戊辰戦役関係史料
- 四十四年 第一〇集 伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並解説
- 四十五年 第一一集 管窮愚考・雲遊雜記伝
- 四十六年 第一二集 川上忠塞一流家譜
- 四十七年 第一三集 本藩人物誌
- 四十八年 第一四集 薩陽過去帳
- 四十九年 第一五集 備忘抄・家久公御養子御願一件
- 五十年 第一六集 鹿兒島県地誌(上)
- 五十一年 第一七集 鹿兒島県地誌(下)
- 五十二年 第一八集 薩藩舊士文章
- 五十三年 第一九集 薩藩先公貴翰 乾
- 五十四年 第二〇集 薩藩先公貴翰 坤
- 五十五年 第二一集 小松帯刀傳・履歴・記事
- 五十六年 第二二集 小松帯刀日記
- 五十七年 第二三集 新修薩鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)
- 五十八年 第二四集 新修薩鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)
- 五十九年 第二五集 三州御治世要覧
- 六十年 第二六集 桂久武日記
- 六十一年 第二七集 明赫記
- 六十二年 第二八集 要用集(上)
- 六十三年 第二九集 要用集(下)
- 平成元年 第三〇集 桂久武書翰

## 鹿兒島県史料刊行委員会委員

五十音順

川越政則	元南日本新聞社社長
芳即正	鹿兒島純心短大教授
桐野利彦	元鹿兒島女子短大教授
桑波田興	鹿兒島大学教授
五味克夫	鹿兒島大学教授
小西四郎	元東京大学教授
犀川碇吉	元甲南高等学校長
竹内理三	元早稲田大学教授
原口泉	鹿兒島大学助教授
福満武雄	鹿兒島新報社専務取締役
宮下満郎	甲南高校教諭
桃園恵真	鹿兒島大学名誉教授
山田尚二	錦江湾高校教諭

桂久武書翰

平成二年三月

発行

鹿児島市城山町五の一

鹿児島県史料刊行会

鹿児島市錦江町二一五五番

印刷

有 互 助 印 刷

電話 二四一三〇四

